

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

文化財部は平成 24 年度より教育委員会から市長部局の経済観光文化局へと移り、教育委員会の補助執行として、文化財活用を含め多岐にわたる文化財保護業務に取り組んでおります。

本書は、平成 28 年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する事前審査件数は大幅な増加傾向をみており、これに伴う緊急調査件数は平成 25 年度より微増し続けています。今後とも埋蔵文化財保護業務については適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成 29 年 12 月 27 日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　　言

- ・本書は、埋蔵文化財課、文化財保護課、大規模史跡整備推進課が平成 28 年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある平成 28 年度調査のうち調査番号 1626, 1631, 1637、過去の調査 8916, 9554, 1548 はこの年報をもって本報告とする。
- ・V の各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VI については文化財保護課(水野哲雄)が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は本田浩二郎が担当した。

目　　次

- I 平成 28 年度文化財部の組織と分掌事務
- II 開発事前審査
- III 発掘調査
- IV 公開活動
- V 平成 28 年度発掘調査概要および報告
- VI 平成 28 年度新指定文化財
報告書抄録

I 平成 28 年度文化財部の組織と分掌事務

【文化財部】51 文化財部の組織と分掌事務

【文化財保護課】10

- 運用係（事3、文1）
整備活用係（事1、文2）
文化財調査普及係（文1、学1）
部の総括、文化財施設の管理
史跡の保存・整備・活用、文化財関係団体との連絡調整
文化財保護審議会、文化財の調査、普及事業

【大規模史跡整備推進課】5

- 福岡城跡整備係（事1、文2）
鶴臈館跡整備係（文1）
福岡城跡の調査・整備、課の庶務
鶴臈館跡の調査・整備

【埋蔵文化財課】33

- 事前審査係（文4）
主任文化財主事（文1）
管理係（事3）
調査第1係（文5）
主任文化財主事（文4）
調査第2係（文5）
主任文化財主事（文3）
公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査
埋蔵文化財審査課・埋蔵文化財調査課の予算・決算、経理、課の庶務
課の庶務・主に東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
国庫補助事業総括・主に西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存

【課長（文化財活用計画担当）】4

【埋蔵文化財センター】7

- 運営係（文2事2）
保存分析係（文2）
施設の管理運営、埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等、教育普及
埋蔵文化財の保存・分析
事：事務職 文：文化財専門職 学：文化芸術職

埋蔵文化財課の職員構成（管理係係員2は事務職。他は文化財専門職）

○埋蔵文化財課長	常松幹雄	調査第1係長	古武学
管理係長	大塚紀宜	調査第2係長	加藤隆也
係員	横田忍 入江よう子 松尾奈緒子	係員	木下博文 板倉有大 細石朋希
事前審査係長	佐藤一郎	係員	松崎友理 山本晃平
係員	清金良太 吉田大輔 大森真衣子	係員	小林義彦（再任用）
主任文化財主事	池田祐司	埋蔵文化財専門員	中園将祥（嘱託員）
主任文化財主事	瀧本正志 扇山洋 井上蘿子	主任文化財主事	山崎龍雄（再任用）
		総務課付	加藤良彦 荒牧宏行 田上勇一郎
			星野恵美（陸前高田市派遣）

II 開発事前審査

1. 概要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めており、また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。平成24年8月からは本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。

2. 平成28年度の事前審査

平成28年度の事前審査件数は、表1のとおりである。福岡市域の開発事業を反映するよう増加傾向となるが、平成22年からは年間2500件前後で高止まり状態となる。平成26年度から平成28年度にかけて、若干の増減はあるが、ほぼ横ばいの状況となっている。

表1 平成16～28年度事前審査件数

事業	内訳	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
公共	事業照会審査件数	662	668	665	769	862	1,143	1,191	1,181	1,181	1,220	989	1,381	1,381
	申請件数	112	113	133	161	202	228	195	191	184	135	290	155	164
	審査件数計	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365	1,355	1,279	1,536	1,545
民間	窓口照会件数	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791	7,195	6,491	12,301	12,356	14,349
	FAX照会件数	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716	7,170	7,999	8,648	9,317	9,936
	照会件数計	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507	14,365	14,490	20,949	21,673	24,285
	申請（審査）件数	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176	1,261	1,339	1,140	1,147	1,123
公・民審査件数計		1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626	2,694	2,419	2,683	2,668

申請内容

公共事業に伴う依頼164件となり、昨年度に比べわずかに増加した。事業者別では、国機関32件、福岡県2件、福岡市127件、その他26件となる。事業別に見ると水道・電気等71件、道路10件、学校関係31件、空港関係36件、区画整理1件となり、その他の開発・建物は16件である。このうち公有財産の売却等の土地調査にかかる事前審査依頼は8件であった。なお事業照会件数は1,381件で、昨年度と同数となる。事業別の内訳は、上下水道1,078件、学校80件、道路93件、公園14件、空港10件であった。

民間事業1,124件の届出内容は、事業別では個人住宅341件、戸建住宅122件、共同住宅400件、宅地造成41件、個人住宅兼工場または店舗7件など住宅関連事業をあわせると749件となる。土地売買・区画整理計画地の事前の調査依頼はともに1件であった。共同住宅の件数が前年度比で1.8倍と著しい増加傾向となる。

公共・民間の申請件数の合計を区分に見ると、博多区362件、早良区284件、西区197件、南区170件となり、前年と比べ西区の開発事業が増加したことが分かる。これは九州大学の伊都キャンパス移転に伴う周辺地域の開発行為増加を反映した結果である。

指導内容

公共・民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度への継続、取り下げを除くと審査件数（申請件数）は1,250件で、前年とほぼ同数となっている。総括的に見ると書類審

査での回答 946 件、踏査 43 件、試掘 244 件である。審査結果は開発同意 124 件、慎重工事 941 件、工事立会 120 件、発掘調査 55 件、要協議（設計未定、売却予定で跡跡ありなど）10 件である。

試擬調查・確認調查

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地隣接地・包蔵地外で行われる試掘調査（以下試掘調査と総称する）は平成28年度で267件実施した。区別の内訳として東区19件、博多区98件、中央区15件、南区38件、城南区12件、早良区52件、西区33件となる。対象とした遺跡数は114遺跡である。10件以上試掘した遺跡としては博多遺跡群12件、比恵・那珂遺跡群23件、有田遺跡群12件となっている。包蔵地隣接地および包蔵地外での試掘調査は39件であった。試掘件数としては昨年度に比べ10件程度減少した。

察口等照会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は13,349件、ファックスでの照会は9,936件、あわせて24,285件で、平成27年度より2,612件の増加である。平成24年8月より本市ホームページにて、包蔵地外町名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜と照会件数減を図っているが、窓口件数は一時的に減少したものの、再び増加している。ファックス照会件数は22年度以降毎年1,000件前後増加しているが、28年度は前年度比で600件程度の増加であった。これは不動産の重要事項説明の項目中に「埋蔵文化財の有無」が含まれたことにより、事前の調査・確認が定着したことによる。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

本市では、試掘調査や発掘調査などの成果にもとづき、より正確な埋蔵文化財包蔵地範囲の実情に近づけるため、また、事前審査業務の効率を図るため、包蔵地・隣接地の改訂作業を随時実施しており、平成28年度は22件、32遺跡で実施した。遺跡の範囲拡大は6件、縮小は5件あり、14件で隣接地の解除を行った。また、平成28年度には1遺跡（千里大久保遺跡）の新規登録と1遺跡の名称変更を行った。

表 2 平成 28 年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別（書類審査・現地踏査・試掘調査）で見た判断指示の結果																区別審査件数	
		開発同意		慎重工事			工事立会			発掘調査			協議			審査結果		取り下げ	
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	公民別計	区計	
東	公共	12			6						1						19	119	
	民間	13	2	1	60	1	6	8	0	3	0	0	1			4	1	100	
博多	公共	9	1	42		1	3	14	1	1	2	4				1	79	362	
	民間	9	5	141	1	44	14	12	11	14	20	1			10	1	283		
中央	公共	1		1													2	30	
	民間	2	1	3	11	5		1	2		1				1	1	28		
南	公共			3			1				1						5	170	
	民間	10	2	4	111	21	2	1	4		6				2	2	165		
城南	公共	1					2					1				1	5	126	
	民間	6	3	95		10	0	2	1	0	0	0			2	2	121		
早良	公共	3		19		2	4				1	1					30	284	
	民間	9	4	181	2	36	6	4	7	1	1			1	2	254			
西	公共	4		5		2	7	3			2				1	24	197		
	民間	12	6	119	17	5	2	1		5				4	2	173			
小計	公共	30	0	2	75	0	5	17	14	4	1	0	4	9	0	0	3	164	
	民間	61	5	26	718	4	139	35	20	30	16	0	34	1	0	0	24	1124	
合計		91	5	28	793	4	144	52	34	34	17	0	38	10	0	0	24	14288	

III 発掘調査

1. 平成28年度の発掘調査

28年度の発掘調査件数は、表4に示したように、27年度からの継続事業7件、28年度新規事業47件の計54件で、このうち6件は平成29年度に継続である。文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査48件のほか、92条に基づく学術調査4件、史跡整備に伴う調査2件を含んでいる。

53件の発掘調査面積は14,535m²で、前年度と比べ調査件数はほぼ横ばいであるが、調査面積は微減となる。公民別では公共事業が1,728m²、民間事業が12,807m²であり、民間が88%を占めている。公共事業面積が前年度比で25%となり大幅に減少する一方で、民間事業は約20%増加している（平成24年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業扱いとしている）。今年度も前年度に続き土地区画整理や圃場整備事業に伴う発掘調査は実施していない。

個々の発掘調査の面積としては、100m²以下が11件、101～300m²が18件、301～500m²が10件、501～1,000m²が5件、1,001～10,000m²が3件となり、中・大規模な開発事業の増加がみられる。300m²以下の小規模調査は29件と、前年度の34件から件数・比率とも減少する。1件あたりの平均調査面積は269m²、公共事業で864m²、民間事業では246m²である。区ごとでは東区2件、博多区31件、中央区2件、南区3件、城南区0件、早良区1件、西区5件となり、博多区での調査件数の増加が顕著である。

面積では、東区320m²、博多区10,032m²、中央129m²、南区951m²、城南区0m²、早良区242m²、西区3,104m²である。博多区は調査件数・調査面積とともに他区を大きく上回る状況にあり、西区では九州大学伊都キャンパス建設による周辺地区的開発に起因する増加傾向がみられる。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは複数の遺構面を調査するため、実際の発掘面積は増加する。

表3 平成28年度 発掘調査区分別調査件数・面積（前年度継続分7件・学術調査4件を除く）

	東	博多	中央	南	城南	早良	西	全市
公共調査	0	2	0	0	0	0	0	2
民間調査	2	29	2	3	0	0	5	41
計	2	31	2	3	0	0	5	43
調査面積総計（m ² ）	320	10,032	129	951	0	0	3,103	14,535
平均調査面積/1件	0	324	65	317	0	0	621	338

表4 発掘調査件数の推移（）前年度からの継続件数

事業	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	
民 間	調査件数	21 (6)	30 (0)	27 (1)	22 (2)	42 (4)	50 (5)	47 (5)	54 (7)
	調査面積（m ² ）	11,190	15,649	6,175	15,333	20,293	15,786	10,687	12,807
圃場整備	調査件数	4 (0)	4 (2)	1 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	調査面積（m ² ）	0	9,775	1,984	0	0	0	0	0
公 共	調査件数	16 (3)	16 (3)	23 (3)	19 (2)	5 (1)	6 (1)	8 (2)	2 0
	調査面積（m ² ）	33,099	22,856	14,322	14,440	3,315	1,996	6,842	1,728
合 計	調査件数	41 (9)	50 (5)	51 (7)	41 (4)	47 (5)	56 (6)	55 (7)	54 (7)
	調査面積（m ² ）	44,289	48,280	22,481	29,773	23,608	17,782	17,529	14,535

IV 公開活動

市民への公開目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。平成28年度は博多区比恵遺跡群第144次調査と西区元寇防塁第12次調査にて現地説明会を実施し、多くの見学者が訪れた。また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成28年度は、福岡市立城西中学校・壱岐が丘中学校・席田中学校・那珂中学校・高取中学校の生徒を対象に市内の発掘現場及び整理室において、職場体験学習を行った。

公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書・年報は、表7のとおり計26冊が刊行された。

V 平成28年度発掘調査概要・報告

調査概要・報告は表6の調査番号順に掲載し、位置番号は右ページの調査一覧表と一致する。
 また、各報文の図【1. 調査地点の位置】の（ ）内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

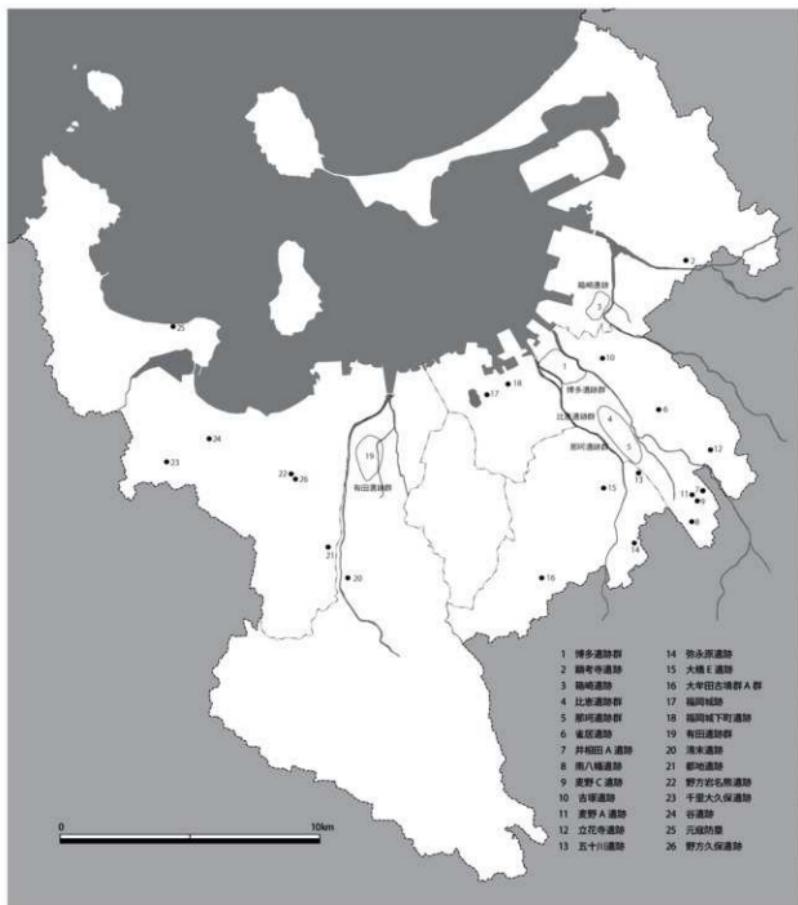


表5 平成28年度発掘調査遺跡一覧表

1 博多遺跡群	6 鹿児遺跡	11 安野A遺跡	16 大牟田古墳群A群	21 都地遺跡	26 野方久保遺跡
2 諸季寺遺跡	7 井相田A遺跡	12 立花寺遺跡	17 福岡城跡	22 野方岩名原遺跡	
3 福崎遺跡	8 南八幡遺跡	13 五十川遺跡	18 福岡城下町遺跡	23 千里大久保遺跡	
4 比恵遺跡群	9 安野C遺跡	14 労永源遺跡	19 有田遺跡群	24 谷遺跡	
5 那珂遺跡群	10 吉塚遺跡	15 大橋E遺跡	20 清末遺跡	25 元城防壁	

表 7 平成 28 年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号
1304	原遺跡20	第34次調査	1526
1305	有田・小田部57	有田遺跡群第262次調査報告	1530
1306	飯倉B遺跡2	飯倉B遺跡第3次調査の報告	1512
1307	井尻B遺跡27	井尻B遺跡第42次調査報告	1434
1308	クエゾノ遺跡2	クエゾノ遺跡第4次調査の報告	1419
1309	山王遺跡8	第10次調査報告	1520
1310	下山門遺跡2	第2次調査報告	1510
1311	住吉神社遺跡2	住吉神社遺跡第3次調査報告	1408
1312	那珂76	那珂遺跡群第156次調査の報告	1505
1313	野方平原2	野方平原遺跡第3次調査報告	1522
1314	野多目C遺跡5	野多目C遺跡第6次調査報告	1438
1315	博多157	博多遺跡群第204次調査報告	1449
1316	箱崎49	箱崎遺跡第73次調査報告	1501
1317	箱崎50	箱崎遺跡第74次・75次調査報告	1502・1506
1318	箱崎51	箱崎遺跡第76次調査報告	1507
1319	比恵76	比恵遺跡群第136次調査報告	1448
1320	比恵77	比恵遺跡群第137次調査報告	1503
1321	比恵78	比恵遺跡群第140次調査報告	1528
1322	福岡城下町遺跡1	福岡城下町遺跡第1次調査の報告	1435
1323	麦野A遺跡9	麦野A遺跡第23次・24次調査報告	1441・1446
1324	弥永原8	弥永原遺跡第11次調査の報告	1436
1325	藤崎遺跡21・千里遺跡2・千里向川原遺跡1	藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第2次調査・千里向川原遺跡第2次調査の報告	0262・1028・1340
1326	史跡鴻臚館跡	鴻臚館跡23 北館部分の調査 (2)	0008・0109・0218・0617・0706・0821・0906・1013・1116・1205・1314
1327	「国史跡 福岡城跡」	本丸武具櫓跡 発掘調査報告	1334・1439
1328	元岡・桑原遺跡群28	第20次・第42次・第53次・第57次・第63次・第66次調査の報告	0001・0451・0768・1103・1328・1525
	埋蔵文化財年報VOL.30	平成27 (2015) 年度版	1511・1514・1518・1521・1523・1527・1535・1536・1542・1549・1550

表 8 平成 28 年度包蔵地等改訂一覧

番号	遺跡名称	変更事項
1	打ヶ浦遺跡	遺跡名称の変更
2	東鹿児島古墳群A・B・C・D・E群、駄ヶ原遺跡、松原遺跡、牧内古墳群、羽黒神社遺跡	包蔵地の面積（一部縮小・一部解除） 包蔵地の新設
3	千里大久保遺跡	隣接地を一部解除
4	新開池遺跡	隣接地を一部解除
5	御崎B製铁遺跡	隣接地を一部解除
6	仲ノ原遺跡	包蔵地範囲の一部を指定解除及び隣接地の一部を解除
7	五十川遺跡	包蔵地・隣接地範囲を一部拡大
8	田島和尚頭遺跡	隣接地を一部解除
9	五十川遺跡	包蔵地範囲の拡大
10	原遺跡	隣接地を一部解除
11	三宅B遺跡	隣接地を一部解除
12	妻野C遺跡	隣接地を一部解除
13	寺島遺跡	隣接地を一部解除
14	芦抜遺跡	隣接地の一部を拡大
15	吉拔遺跡	包蔵地範囲の一部を拡大
16	中央ノ原遺跡	隣接地を一部解除
17	寺原A古墳群	包蔵地範囲の一部を解除
18	羽根戸原B遺跡	包蔵地範囲の一部を拡大
19	羽根戸原B遺跡	隣接地を一部解除
20	周越古墳群F群	包蔵地の指定解除（F群）及び隣接地一部解除
21	丸鹿山古墳群・徳永A遺跡	隣接地を一部解除
22	飯氏遺跡	包蔵地範囲を一部変更及び隣接地の一部を解除

1601 博多遺跡群第 205 次調査 (HKT205)

所在地 博多区下呉服町 419 番、420 番、421 番
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.4.4 ~ 2016.7.31
 調査面積 325m²
 担当者 田上勇一郎・服部瑞輝
 処置 記録保存

調査の概要

調査地点は博多遺跡群を形成する 3 列の砂丘列の一一番海側、「息浜」北東部に位置する。調査地点の現標高は 4.6 m である。

重機により標高 2.2 m ~ 2.7 m まで掘り下げ、第 1 面、砂丘面まで掘り下げ、第 2 面の調査を行った。調査区東側では、第 1 面で砂丘面が露出した。

調査では、井戸遺構、石組土坑、石基礎、溝、方形土坑など 15 世紀から近世にかけての遺構を検出した。

遺物は、中国明代の龍泉窯系青磁、景德鎮青花磁、華南産青花磁・三彩陶器や国产の陶器、土器、瓦などが出土した。また、獸骨、魚骨や炭化米・炭化小麦など、食生活が窺える遺物も出土している。

元寇防壁より海濱側に位置すると想定される当調査地は、15 世紀より町場となったことが確認された。



1. 調査地点の位置 (48 千代・天神 0121 S=1/8000)



2. 調査区全景 (北東から)

1602 麦野 A 遺跡第 26 次調査 (MGA26)

所在地 博多区麦野 3 丁目 1
 調査原因 小学校施設建設
 調査期間 2016.5.11 ~ 2016.5.31
 調査面積 84.0m²
 担当者 細石朋希
 処置 記録保存

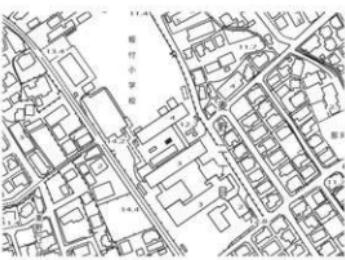
調査の概要

麦野 A 遺跡は福岡平野東部の御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する。この段丘は花崗岩風化疊層を基盤とし、Aso-4 火碎流堆積による下層の八女粘土層及び上層の鳥柄ローム層からなる南北約 1.2km、東西約 0.4 km の洪積台地である。

調査地点はこの台地上の北側中央部付近に位置する。遺構は GL-15 ~ 35cm の赤褐色を呈する上部鳥柄ローム層で検出した。遺構面の標高は 13.65 ~ 13.75 m を測る。遺構は少数のピット状遺構を検出した。

遺物は時期不明の土師器小片に加え、須恵器の蓋や内黒釉の小片等古代の遺物がわずかに出土する。

また、調査区北側中央の上部ローム中より、標高 13.65m 前後の位置からは、旧石器時代の黒曜石のチップが出土した。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 0048 S=1/4000)



2. 調査区全景 (北西から)

1603 比恵遺跡群第142次調査 (HIE142)

所在地 博多区中呉服町 419番、420番、421番
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.5.9 ~ 2016.9.16
 調査面積 325m²
 担当者 瀧本正志・山本晃平
 処置 記録保存

調査の概要

調査地点は、博多区に所在する洪積台地の比恵・那珂丘陵の中央部、比恵遺跡の南辺部中央に位置し、標高 7.4 m を測る宅地である。

調査では弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と中世墓を検出した。集落跡は方形の竪穴住居、掘立柱建物(高床建物)、素振りの井戸、土壙等で構成される。中世墓は土壙墓である。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製武器、土製武器、滑石製装飾品などが出土し、総量はコンテナ箱で 46 箱を数える。量的にも弥生時代後期後半と古墳時代後期の遺物が大半を占める。

検出した遺構や遺物から、当地では弥生時代中頃から人々の生活が顕在化し、以降も継続して生活が営まれ、特に弥生時代後期と古墳時代後期(6世紀中頃)に集落の盛期を迎えていたことが判明した。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/4000)



2. 調査区全景 (西から)

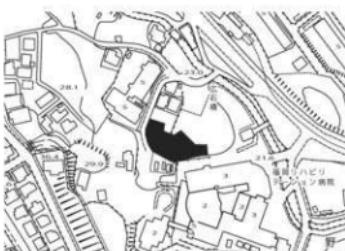
1604 野方岩名隈遺跡第2次調査 (NKG2)

所在地 西区野方 7 丁目 763、764
 調査原因 病院増築
 調査期間 2016.5.9 ~ 2016.7.29
 調査面積 1,037m²
 担当者 屋山洋
 処置 記録保存

調査の概要

野方岩名隈遺跡は、早良平野と今宿平野を区切る飯森山・叶ヶ岳の山脈から東側に延びる尾根と扇状地上に位置する。

1次調査では野方岩名隈古墳の周溝の他、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居 7 輛が検出された。2次調査は、尾根から北側に下った谷中に位置する。調査の結果、本調査区は西から東へ傾斜する斜面と思われたが、近代の畑造成によりほぼ平坦に削平されているのが判明した。調査区全体が谷の中に位置し、5 ~ 20cm 程の礫を主にする 2m 程度の砂礫層が堆積する。調査区中央に浅い谷があり、そこから弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土する。遺物は1次調査と同時期で尾根上からの流れ込みである。その他には古墳に伴う可能性がある須恵器片と 7 ~ 8 世紀頃の須恵器片、中世~近世の陶磁器がそれぞれ 1 ~ 2 点ほど出土した。



1. 調査地点の位置 (104 拾六町 0523 S=1/4000)



2. 調査区全景 (東から)

1605 雀居遺跡第18次 (SAS18)

所在地 福岡空港内（大字雀居地内）
 調査原因 空港施設整備
 調査期間 2016.7.1 ~ 2017.3.15
 調査面積 1,200m²
 担当者 板倉有大・田上勇一郎・服部瑞輝
 処置 記録保存

調査の概要

雀居遺跡は、福岡平野の東縁、東に月隈丘陵、西に御笠川を臨む沖積低地内に位置する。低平な自然堤防状の微高地で、遺跡が形成される地盤は比較的乾燥したシルト層もしくは粘質砂層からなるが、その直下には地下水層が形成されており、概して湿润な環境にある。下層地形の埋没後に形成された上層部分では、一帯に平安時代の水田遺構（田面・畦畔・水路）を確認した。下層の微高地部分では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物や竪穴建物、貯蔵穴、土坑、柱穴などが約1,400基と多数高密度に確認された。下層の河川部分では、主に古墳時代の貯水施設と考えられる大型土坑と、土器を投棄した土器群、土器・石器・木器を多量に含んだ遺物包含層を確認した。

弥生時代から平安時代の土器、石器、木器がコンテナケース約1,000箱と多量に出土した。特に古墳時代の木器は、河川部分を中心に、用具類から建築部材まで幅広く約300点が出土した。微高地集落部分からは、古墳時代の銅鏡（青銅製の矢じり）やガラス製・石製の装身具が出土した。

過去の調査（10次・13次）と連続する微高地部分を調査し、弥生時代から平安時代にかけての集落および水田遺構の新たな資料を得ることができた。また、これまでの調査では分かっていなかった、古墳時代の微高地から河川への移行部分を調査し、当該期の総合的な集落景観の復元が可能となつた。



1. 調査地点の位置 (23 雀居 2633 S=1/8000)



2. 調査区全景 (南東から)



3. 木製品出土状況 (北東から)



4. 遺物出土状況 (南東から)



5. 古墳時代銅鏡出土状況 (南西から)

1606 箱崎遺跡第79次 (HKZ49)

所在地 東区箱崎1丁目2809番6, 2828番1
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.5.17 ~ 2016.5.18
 調査面積 120m²
 担当者 大森 真衣子
 処置 記録保存

調査の概要

第79次調査地点は箱崎遺跡の中央部に位置する。試掘調査により既存建物基礎により広範囲にわたり遺構面が損壊されていることが判明したため、残存部分について調査を行い記録保存することとなった。

調査では地表面より160cmほど掘り下げた砂丘面において、方形竪穴状の土坑とピット群を検出した。方形土坑底面には黄白色粘土が貼り付けられるが用途は不明確である。また遺物包含層とみられる黒褐色粘質土からは土師器小皿がまとまって出土した。

遺物はコンテナケース2箱分の白磁・青磁などの貿易陶磁器と土師器が出土した。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/4000)



2. 調査区全景

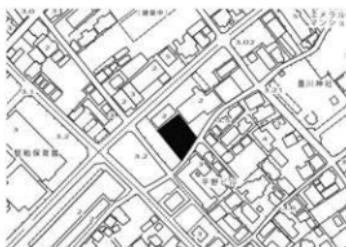
1607 吉塚遺跡第15次 (YSZ15)

所在地 博多区吉塚3丁目445番5
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.5.30 ~ 2016.6.3
 調査面積 270m²
 担当者 佐藤 一郎
 処置 記録保存

調査の概要

第15次調査地点は吉塚遺跡の北西端部付近に位置している。調査では古墳時代後期の時期と考えられる土坑と時期不明の溝一条、および遺物包含層を検出した。遺物包含層は7世紀前半代の土師器・須恵器を含むもので、南側からの堆積層と考えられる。遺構面は地表面から130cmほど掘り下げた灰白色砂層で、遺構密度は低い。溝は遺物包含層正面から掘り込まれており、古代以降のものと考えられるが遺物の出土はなく時期は特定できない。

遺物はコンテナケース1箱分の土師器・須恵器が出土した。遺構密度と遺物の量から、集落の縁辺部に位置するものと判断される。



1. 調査地点の位置 (35 吉塚 0123 S=1/4000)



2. 調査区全景

1608 博多遺跡群第 206 次 (HKT206)

所在地 博多区奈良屋町 46 番 1, 2, 47 番 1, 2, 3, 4
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.6.13 ~ 2016.8.24
 調査面積 170m²
 担当者 中尾祐太
 処置 記録保存

調査の概要

博多遺跡群は、博多湾沿岸の中央付近の砂丘上に所在する遺跡群である。本調査地点は、遺跡のやや北寄りに位置する。

本遺跡群は弥生時代以降、継続した集落が確認されており、特に、中世には都市として発展することがこれまでの調査・研究により明らかになっている。後世の擾乱などにより、上面の遺構はほとんど残存しておらず、実質 1 面での調査となつた。検出遺構は、中世から近代にかけての井戸、土坑などで、これらの主要遺構は 14 世紀以降のものが多い。周囲の調査地点にみられる石組土坑を検出したが、擾乱によりその原型はとどめていなかった。

遺物は土師器および中国、朝鮮半島の陶磁器が複数出土している。なお、14 世紀以前の確実な遺構は検出していないが、包含層中からは一定量の遺物が出土している。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南西から)

1609 五十川遺跡第 20 次 (GJG20)

所在地 博多区諸岡 3 丁目 647 番 1
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.6.27 ~ 2016.8.24
 調査面積 247m²
 担当者 松崎友理
 処置 記録保存

調査の概要

五十川遺跡は阿蘇山起源の Aso-4 火碎流によって形成された洪積台上に立地する集落遺跡の一つである。遺構は標高約 8 m の八女粘土層上面で検出され、その多くは調査区の東側に集中している。

主な遺構は井戸、土坑、溝である。井戸は弥生時代中期のものが 1 基、古墳時代初頭のものが 2 基の計 3 基を検出した。い土坑は 1 基検出され、調査区東壁際のため全体のプランは検出できていないが、隅丸長方形の平面プランと推定される。弥生時代中期の土器片が出土したことから、近隣の調査地で同様のプランを呈する貯蔵穴が見つかっており、貯蔵穴の可能性が考えられる。

この他には近世の溝が検出され、瓦や下駄、キセルの銅製吸口が出土した。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0088 S=1/4000)



2. 調査区全景 (東から)

1610 福岡城跡第74次(FUE74)

所在地 中央区域内5番2(扇坂)

調査原因 史跡整備

調査期間 2016.6.27～2016.12.28

調査面積 42m²

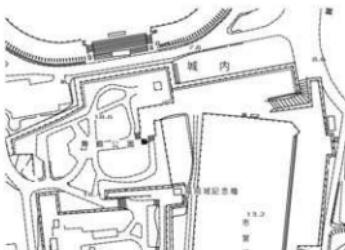
担当者 赤坂亨

処置 現状保存

調査の概要

福岡城では「国史跡福岡城跡整備基本計画」に基づく整備計画が進められており、その対象である二ノ丸扇坂跡において、絵図以外の情報がない坂部分の平面規模・構造確認、門部分の平面形の把握を目的とした発掘調査を行い、復元整備への道筋をつけるものである。

扇坂御門部の調査では鏡柱礎石2と控柱礎石2を確認した。礎石間距離は2.2m(真々)で、御門前面に瓦敷遺構が広がっていた。また礎石西側の踏石は扇坂御門の小扉に伴うものの可能性がある。東側石垣沿いで側溝を確認したが、西側石垣沿いには側溝は無かった。扇坂部(階段部分)の調査では、扇坂の基礎とみられる、円弧状に削られた岩盤が検出された。また、東側石垣沿いで埋没石垣と石組構を検出し、扇坂平坦面の始点と扇坂の傾斜角度および平面距離を確認できた。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 0193 S=1/4000)



2. 調査区全景 (北から)

1611 博多遺跡群第207次(HKT207)

所在地 博多区店屋町170番2

調査原因 簡易宿泊所建設

調査期間 2016.7.1～2016.8.29

調査面積 147m²

担当者 井上蘭子

処置 記録保存

調査の概要

第207次調査地点は博多浜北側砂丘の北西端に位置する。遺構面は5面設定し、第1面～第3面では、第124次地点で検出された南北方向の道路状遺構の延長、中世～近世の石組井戸、土師器集積遺構、土坑、柱穴、溝が検出された。溝の下面で検出した第4面では護岸施設を伴った流路を確認した。西岸は、建築部材を転用した横板を杭で止め、東岸は杭を密集して打ち込んだ構造をとる。時期は16世紀前後と思われる。調査区の北側では砂丘の落ちと湿地状堆積が確認され、この湿地状堆積から箸、下駄、漆器、建築部材などの木製品が多く出土した。

以上から、本調査地点を含む近辺では博多浜の北側の落ち際を整地し、また流路や道路を整備して居住域としていたことが想定される。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/4000)



2. 調査区全景

1612 箱崎遺跡第80次 (HKZ80)

所在地 東区箱崎 6丁目 10-1 (九州大学構内)
 調査原因 学術研究
 調査期間 2016.5.16 ~ 2016.6.8
 調査面積 530m²
 担当者 九州大学埋蔵文化財調査室
 処置 現状保存

調査の概要

調査地は九州大学箱崎キャンパスの中央部、理学部二号館の南側に位置する。本遺跡が立地する砂丘（箱崎砂層）の自然堆積環境と人間活動痕跡の関係を明らかにするため、東西方向に長い調査区（長さ 90 m）を設定し調査を行った。

福岡市内で実施された発掘調査番号としては 1612、箱崎遺跡第80次調査として登録されているが、学内の調査番号としては HKZ1601 として登録されている。

調査の結果、南北方向にのびる砂丘列 2 列、砂丘に挟まれた部分に幅 14 m・深さ 1.5m の溝（12世紀～16世紀を主体とする遺物包含層）、土坑 2 基、不明遺構 1 基を検出した。土坑 S K 01 では多量の炭化物・骨片とともにウシ上腕骨が出土した。また、調査区西寄りの地点でこぶし大～人頭大程度の泥岩礫の集中が 4 m の範囲で認められた。元寇防壁を構成する裏込石などが散在したものである可能性が考えられる。

溝からは龍泉窯系・同安窯系磁器、朝鮮王朝象嵌陶磁などの貿易陶磁器、土師器、須恵器、土鍤・石鍤などが出土した。溝の下層では被熱を受けた礫の集中が見られた。

以上のように、本調査によって当該地における地形環境と中世以降を中心とする箱崎遺跡の広がり、人間活動の痕跡などについて、多くの情報を得ることができた。

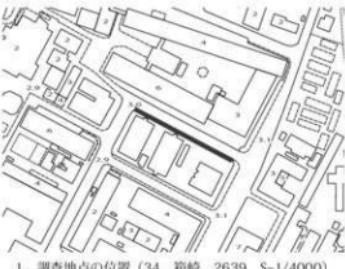
1613 比恵遺跡群第143次 (HIE143)

所在地 博多区博多駅南 4 丁目 120 番 2
 調査原因 事務所兼倉庫
 調査期間 2016.7.4 ~ 2016.8.3
 調査面積 65m²
 担当者 朝岡俊也
 処置 記録保存

調査の概要

比恵遺跡は御笠川・那珂川間の洪積台地上に展開し、本調査区は遺跡の中で北寄りの頂部付近にあたる。

検出遺構は弥生時代中期の円形竪穴建物 1 軒・方形竪穴建物状遺構 4 軒以上・土坑 2 基・柱穴多数と、弥生時代終末期～古墳時代前期の道路東側側溝と考えられる溝である。狭い調査区ながら包含層状に堆積する竪穴建物状遺構の埋土や道路側溝を中心に非常に多くの土器が出土したほか、遺物として弥生時代中期の碧玉製管玉や古墳時代前期の硯の可能性のある板状石製品などがある。道路側溝は隣接する 127 次で西側側溝が検出されており、道路幅は 6 m 程と推測される。なお、調査区壁面では包含層状の竪穴建物状遺構埋土を切って掘削され、地山に達していない遺構を多数認識することができ、古墳時代前期以降の遺構が多数存在した可能性が高いが、上面からの検出は難しく、図化はできなかった。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/4000)



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南東から)

1614 那珂遺跡群第 161 次 (NAK161)

所在地 博多区那珂 1 丁目 442-1, 442-5, 439

調査原因 保育園建設

調査期間 2016.7.11 ~ 2016.10.3

調査面積 240m²

担当者 木下博文

処置 記録保存

調査の概要

那珂遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた標高 9m の低位段丘上に営まれる複合遺跡である。

第 161 次調査地点は遺跡のほぼ中央に位置し、調査地点の西側には那珂八幡古墳が存在している。表土より 50cm ほど掘り下げた鳥栖ローム層で遺構検出を行い、弥生時代中期の円形建物 1 軒、同後期後半～終末の方形竪穴建物 2 軒、古墳時代終末の溝・掘立柱式総柱建物、ピット多数などの遺構を検出した。

遺物は弥生土器をはじめ古墳時代の土器類などがコンテナース 14 箱分出土した。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (西から)

1615 千里大久保遺跡第 1 次 (SNO1)

所在地 西区千里大久保 85-1

調査原因 太陽光発電所建設

調査期間 2016.7.5 ~ 2016.7.23

調査面積 593m²

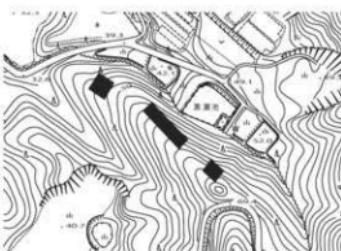
担当者 吉田大輔・細石朋希

処置 記録保存

調査の概要

調査地点は、福岡県立筑前高校の南東側に位置し、南東から北西方向に延びる痩せた丘陵上にある。丘陵上の 3 箇所の地形変換部において古墳時代の墳墓を確認した。主体部は箱式石棺 2 基、竪穴式石室 2 基である。さらに尾根上の平坦面では弥生時代中期の住居跡状の竪穴を確認し、西側斜面でも弥生時代中期から後期前半の土器等を採集した。尾根上の各地点に住居等の施設があったと考えられる。また、1・3 区の墳墓の周溝では、石蓋土坑・土坑を検出した。

今回の調査では、当地周辺の弥生時代から古墳時代にかけての土地利用の変遷、集落・墓地の様相を窺い知る成果を得ることができた。



1. 調査地点の位置 (121 飯氏 2892 S=1/4000)



2. 古墳時代墳墓調査状況 (南西から)

1616 比恵遺跡群第144次 (HIE144)

所在地 博多区博多駅南4丁目162-2, 175
 調査原因 立体駐車場建設
 調査期間 2016.8.1 ~ 2017.2.17
 調査面積 1248m²
 担当者 朝岡俊也・中園将祥
 処置 記録保存

調査の概要

比恵遺跡群は御笠川・那珂川間の洪積台地上に展開し、本調査区は遺跡の中で北東側の微高地頂部付近にある。

遺構は、弥生時代から古墳時代前期までの竪穴住居50軒以上と掘立柱建物15軒を中心、飛鳥時代及び中世の溝、周構状遺構・井戸・貯藏穴・土坑などを検出した。

遺物としては、鹿角装刀子や青銅製鋤先、肥後系・瀬戸内系・東海系等の外来系土器、農具を中心とした木器などがある。

比恵遺跡群の調査では、大規模な面積での調査であり、弥生時代の集落の変遷を追える貴重な調査である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/8000)



2. 調査区全景（東から）

1617 比恵遺跡群第145次 (HIE145)

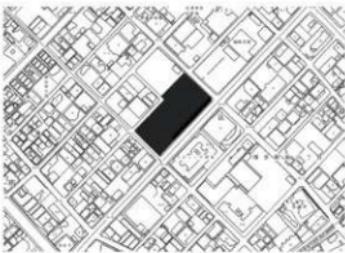
所在地 博多区博多駅南4丁目49-1, 49-2
 調査原因 施設増築
 調査期間 2016.8.1 ~ 2016.9.30
 調査面積 423m²
 担当者 久住猛雄
 処置 記録保存

調査の概要

第145次調査地点は、以前実施された比恵遺跡群50次調査地点D区の南側に接し、一部重複する。

検出遺構は、竪穴住居4棟以上、多数の柱穴群、土坑、溝状遺構4条などである。柱穴には土坑状の大型のものが少なくなく、大型建物の存在も想定できる。土坑としたものには、大型柱穴、井戸（調査区端で全掘不可）、溝も含む可能性がある。溝状遺構には、50次のSD001（中世～近世）とSD055（古墳時代後期～飛鳥時代）の延長がある。遺構の大部分は弥生時代中期～古墳時代前期だが、一部に古墳時代後期～奈良時代、中世、近世がある。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄器、石器、ガラス小玉、碧玉製青玉、玉砥石などがある。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/8000)



2. 調査区西側状況（南西から）

1618 比恵遺跡群第146次 (HIE146)

所在地 博多区博多駅南4丁目122-4, 122-7, 122-8, 123-3他
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.8.1 ~ 2016.9.23
 調査面積 220m²
 担当者 屋山洋
 処置 記録保存

調査の概要

比恵遺跡群は福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた低位丘陵上に位置する。調査区の北側100m付近では那ノ津官家を構成していたと思われる古代の大型掘立柱建物倉庫群が確認されている。

調査では弥生時代後期の土坑と柱穴群、井戸2基の他に竪穴式住居の残欠と思われる掘り込みを確認した。また古代末と近世の溝が出土した。弥生時代後期の柱穴は堀方辺が1m近いものも見られる。遺物はパンケースで25箱出土した。井戸からは祭祀に使用されたと考えられる壺が出土したが、その他の柱穴や土坑から出土した遺物はいずれも細片である。古代末と考えられる溝からは白磁片が出土しており11世紀ごろと考えられる。調査区の中央から北側にかけては南側より深くまで削平されており遺構はほとんど遺存していないかった。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/8000)



2. 調査区全景 (南西から)

1619 雀居遺跡第19次 (SAS19)

所在地 博多区大字雀居（福岡空港内）
 調査原因 空港施設建設
 調査期間 2016.8.1 ~ 2016.12.13
 調査面積 528m²
 担当者 細石朋希・田上勇一郎
 処置 記録保存

調査の概要

調査地は、御笠川右岸の平野部、福岡空港内の標高約6.1~6.3mに位置する。これまでの発掘調査では弥生時代早期~古墳時代前期の集落跡・墓地、古代~中世の水田跡が確認されている。

今回は2面の遺構面を調査した。上面では古代から中世の水田面と南北方向の流路が、下面では東西方向の流路が確認された。上面の流路からは曲物が、下面の流路からは多量の弥生時代中期初頭の土器、容器や弓などの木製品が出土している。今回の調査では、古代から中世のものと考えられる水田面の広がりと、弥生時代から古墳時代にかけての自然地形を確認できた。



1. 調査地点の位置 (23 雀居 2633 S=1/8000)



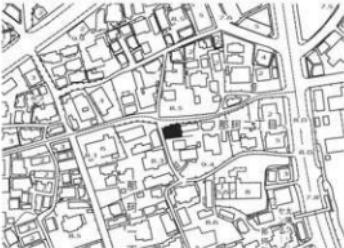
2. 調査区全景 (北から)

1620 那珂遺跡群第 162 次 (NAK162)

所在地 博多区那珂 2 丁目 17 番 4
 調査原因 個人住宅
 調査期間 2016.12.1 ~ 2017.1.31
 調査面積 168. 65m²
 担当者 屋山洋
 処置 記録保存

調査の概要

162 次調査では弥生時代中期～終末に掛けての井戸 4 基と、古墳時代前期の溝 1 条、古代の大型掘立柱建物 1 棟、その他に弥生時代後期から古代にかけての土坑、柱穴群が出土した。近現代の建物基礎による擾乱がある他、竪穴式住居床下掘方の残骸の痕跡もみられ、全体的な削平も受けている。弥生時代中期から終末に掛けての 4 基の井戸からは多量の遺物が出土した。中期の可能性がある井戸は八女粘土層をわずかに掘り込んでいるだけで、終末期の井戸に比べて浅く、廃棄時の祭祀もみられなかった。弥生時代終末の 3 基からは底部直上で祭祀に使われたと考えられる完形の壺や甕が数点ずつ出土した。古墳時代初頭の溝からは壺と甕がまとまって出土した。古墳時代から古代にかけては柱穴と土坑が散漫に分布する。古代の大型掘立柱建物は南北方向を主軸とする 2 間 × 3 間の掘立柱建物で、床面積は 30 m² を測る。



1. 調査地点の位置 (38 塩原 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南から)

1621 那珂遺跡群第 163 次 (NAK163)

所在地 博多区那珂 2 丁目 17 番 10
 調査原因 個人住宅
 調査期間 2016.8.8 ~ 2016.8.26
 調査面積 39m²
 担当者 田上勇一郎・服部瑞輝
 処置 記録保存

調査の概要

第 163 次調査区は那珂遺跡群の中心からやや南東寄りの、洪積台地の台地上東端付近に位置する。

本調査区は西側の道路沿いにおいて著しく擾乱を受けており、また近年埋め立てられたとみられる井戸の掘込みや重機による掘削坑も見られた。調査ではピットを 22 基確認した。ピットからは土器器片が出土しているが、いずれも小片であり時期を特定することは困難である。

本調査区は著しく擾乱を受けていたが、東側に隣接する未調査の事業対象地では住居址、溝状遺構、土坑などの遺構が濃密に残存しているため、今後注意が必要である。



1. 調査地点の位置 (38 塩原 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (東から)

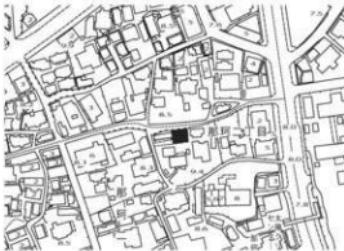
1622 那珂遺跡群第 164 次 (NAK164)

所在地 博多区那珂 2 丁目 17 番 1
 調査原因 個人住宅
 調査期間 2016.8.8 ~ 2016.8.26
 調査面積 66m²
 担当者 田上勇一郎・服部瑞輝
 処置 記録保存

調査の概要

第 164 次調査区は那珂遺跡群の中心からやや南東寄りの、洪積台地の台地上東端付近に位置する。

調査区南側において南北 7.5 m × 東西 6.0 m の長方形竪穴住居 1 棟。調査区北端付近において地下式土壙 1 基のほか、ピット 11 基、竪穴住居内においてがれ跡 1 基、柱穴 1 基、土坑 2 基、床下より溝 1 条、土坑 1 基を検出した。竪穴住居は事業対象地外に、地下式土壙は北側隣接道路にかけて広がっている。そのため住居は北東隅 4 m × 4 m、地下式土壙は南側 2 m × 0.5 m を調査するにとどまった。竪穴式住居より、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての古式土師器片が出土しているほか、住居外のピットからは弥生土器片、地下式土壙からは土師器片および白磁片が出土している。



1. 調査地点の位置 (38 塩原 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (西から)

1623 那珂遺跡群第 165 次 (NAK165)

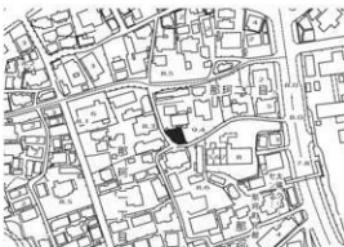
所在地 博多区那珂 2 丁目 17 番 14
 調査原因 個人住宅
 調査期間 2016.8.8 ~ 2016.8.26
 調査面積 141m²
 担当者 田上勇一郎・服部瑞輝
 処置 記録保存

調査の概要

第 165 次調査区は那珂遺跡群の中心から南東寄りの洪積台地の台地上東端付近に位置する。

調査では 5 間 × 5 間の掘立柱建物跡 1 棟、竪穴住居 2 棟、方形土坑 2 基、長方形土坑 1 基、溝状遺構 3 条、その他土坑、柱穴、ピット合わせて約 220 基を検出した。竪穴住居は調査区北東側に南北 4.9 m × 東西 4 m の方形状のものが完形で 1 棟、南側道路沿いの攪乱で南北半分を削平されたものが 1 棟である。長方形土坑は完形竪穴住居の南西側に切られる形で隣接しており、そのうち 1 基は長径 1.8 m の隅丸長方形の形状から、土壙墓の可能性もある。

掘立柱建物跡の柱穴からは白磁の小片が見つかっており、中世のものと考えられる。



1. 調査地点の位置 (38 塩原 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (東から)

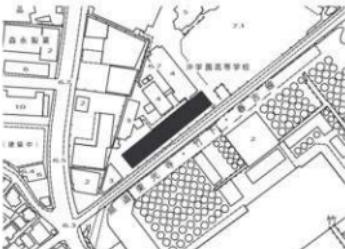
1624 那珂遺跡群第 166 次 (NAK166)

所在地 博多区竹下 2 丁目 1 番 33 号
 調査原因 学校施設建設
 調査期間 2016.7.28 ~ 2016.7.31
 調査面積 276m²
 担当者 大森 真衣子
 処置 記録保存

調査の概要

第 165 次調査区は那珂遺跡群の北西部に位置する。調査は校舎建設予定範囲のなかで、遺構が確認された箇所について実施した。

検出した遺構として、近世に属する道路状遺構、井戸、溝、土抗等があるが、遺構密度は比較的低い。土抗は古代の時期に属するものである。遺構面とした鳥栖ローム層は、現地表面から 180cm ほど深さを測り、周辺の調査区より低くなる。これは那珂遺跡群と比恵遺跡群の間に存在する鞍部地形を反映したものと考えられる。遺物は弥生土器・須恵器・近世陶磁器などがコンテナケース 3 箱分出土した。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南東から)

1625 箱崎遺跡第 81 次 (HKZ81)

所在地 東区箱崎 6 丁目 10 番 1 号
 調査原因 学術研究
 調査期間 2016.8.22 ~ 2017.3.24
 調査面積 320m²
 担当者 九州大学埋蔵文化財調査室
 処置 現状保存

調査の概要

九州大学箱崎キャンパスの中央図書館南側で 4 か所の調査区を設定した。防音講義室に接する調査区では、地表面から 1.3m の深さで大型の角礫が、南北 17m 以上にわたり整然と並んでいた状況が確認された。基底石とみられる 40 ~ 75cm 大の礫石は、博多湾岸である西側に面を揃え直線的に並ぶ。礫石の間には角ばった礫を詰め込んでいる。石列は部分的に三段ほど積み上げられた状態で残り、その高さは 90cm を測る。基底石の下部から 14 世紀前半代の土器が出土しており、築造年代もそれ前後と推測できる。

防音講義室と中央図書館の間では、大正期以降のインフラ工事により大きく破壊されるが基底石とみられる石材 2 石と裏込石が、原位置を保った状態で検出された。これにより全長 40m の範囲にわたり石積み遺構が確認されたこととなった。

発見された遺構は、発見場所や構築方法から、文永の役後に、再度の蒙古襲来に備えて薩摩国が造営分担したとされる元寇防壁の一部である可能性が高いと考えられる。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8000)

1626 谷遺跡4次(TAN4)

所在地 西区今宿町字法花寺198番1他10筆
 調査原因 幼保園建設
 調査期間 2016.8.23～2017.1.17のうち13日間
 調査面積 392m²
 担当者 池田祐司・荒牧宏行・中尾祐太・松崎友里
 処置 記録保存

調査の概要

調査に至る経緯

平成28年3月9日付で上記地についての開発計画事前協議申請書(27-2-1095)が学校法人松原学園より提出された。対象地は前年度に埋蔵文化財の有無についての照会(26-2-638)が提出されており、試掘と開発計画についての協議を行っていた。試掘は対象地が広範囲であり、丘陵部には樹木が茂っていたため数回に分けて実施した。26年度には南側の丘陵頂部周辺(2区)で7本のトレンチを入れたものの遺構遺物は確認できず、東側の畑地(3区)では中世末と考えられる遺構を確認した。27年度には丘陵北側の平地(1区)で追加試掘を行い時期不明のピット少量を確認した。以上の試掘結果と開発計画をもとに協議を行い各地点について次のように対応した。1区では削平が行われる範囲について工事立会。3区は大部分が遺構面に影響がない程度の盛土計画であり、北側のスロープ部分を設計変更により遺構面を保存し、北側道路の拡幅部分について工事立会を実施する。2地点は慎重工事とした。

1地点は平成28年8月23日から掘削工事の立会を行い、予想以上にピットなどの遺構を確認し26日までに記録を行った。試掘結果から慎重工事としていた2地点は、9月2日に工事で巨石が掘り出されているという近隣住民からの通報があり、現地に赴いたところ古墳石室の石材が撤去され、かろうじて掘方が残っていることを確認した。このため事業主側と協議を行い、残存する石室掘方、墓道等の記録を9月6日から9日まで行った。この期間中には造成工事で新たに2基の石棺墓が出土し記録をおこなった。また9月15日にも石棺墓出土の連絡が施工業者からあり、16日に記録を行った。3区は翌年1月16、17日に道路拡幅、側溝設置工事の掘削に立会し、確認したピット等の記録を行った。

予想以上の遺構が出土し、その度に記録を行った。2区の古墳墓道の一部、3区の大部分については未掘で保存されている。以下、地点ごとに記録した報告を行う。



図1. 調査地点の位置 (112 今宿 0627 S=1/4000)

立地と環境

対象地は高祖山から北に派生する丘陵の末端付近の標高10m～18mに位置し、独立した高まり状をなす。大塚古墳からは南東約400mである。谷遺跡内ではこれまで3次の調査が行われているが、いずれも遺跡北側の低地部で弥生時代終末から古墳時代前期を中心とした遺構遺物を確認している。丘陵部での調査は今回の4次調査が初例である。丘陵南側には谷上古墳群C群が分布し福岡県による調査が行われている(福岡県38集)。

調査の記録

1区

対象地北側の平坦地で、北側の道路は切土成形で2mほどの高低差がある。表土を除

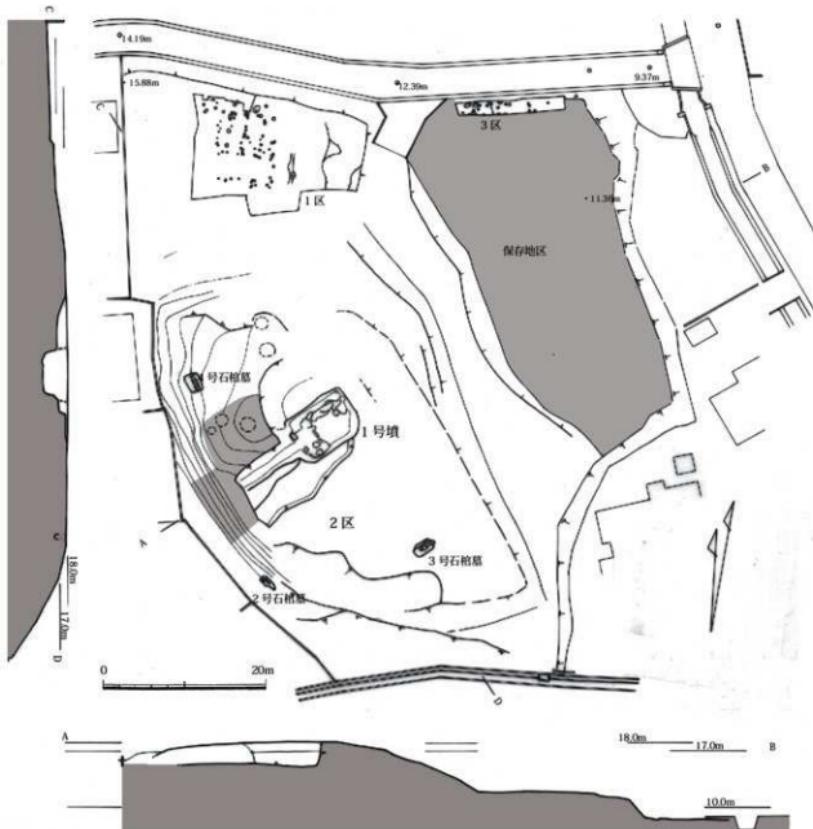


図2. 調査区位置図 (1/600)

去した地表下30cmほどの黄褐色土上面でピット群を確認した。調査区東側のピットが少なくなる付近から地山が下がり、旧地形を反映したものと考えられる。ピットの径は20cmから40cmほどで、覆土はいずれもおよそ同様の茶褐色土で、覆土中位に炭粒を多く含むものがある。ピットは南側ほど深い傾向があり、緩斜面が削平されているものと考えられる。大部分のピットが南北・東西方向に並んでおり建物の柱であることは一見してわかる。3棟の掘立柱建物を復元したが不確実である。SBO1と柵または南側に建物が建つ配置も想定できよう。また出土した遺物は2つのピットから1点ずつ出土した土師質の小土器片のみで時期は不明である。中世末を想定している。調査範囲は238m²を測る。

SBO1 2間×2間を想定した。南北3.4m、東西4.2mを測る。南北軸はN-7°-E。ピットの径は西側が40cm前後で東側より大きめである。

SBO2 2間×3間を復元したが一部並ぶピットを欠く。南北軸はN-2°-E。南北長5.1m、東西長3.9mほどである。

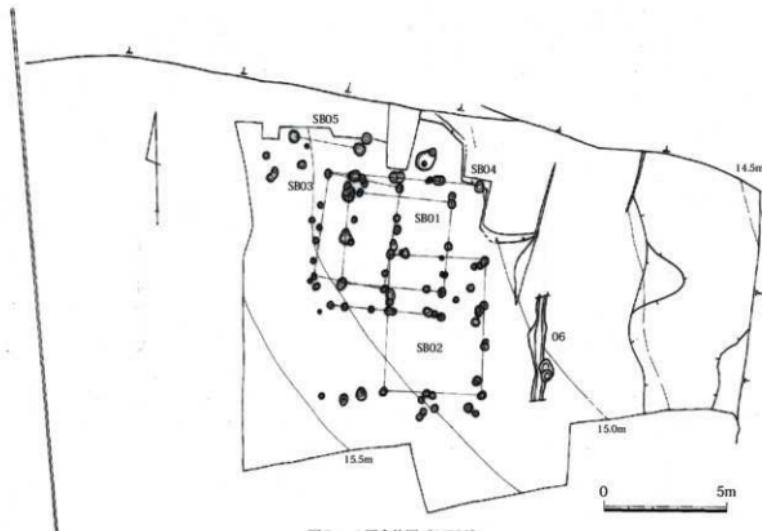


図3. 1区全体図 (1/200)

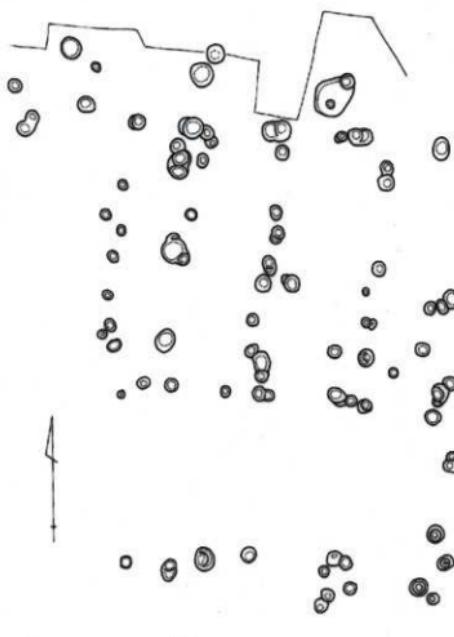


図4. 1区ピット位置図 (1/100)

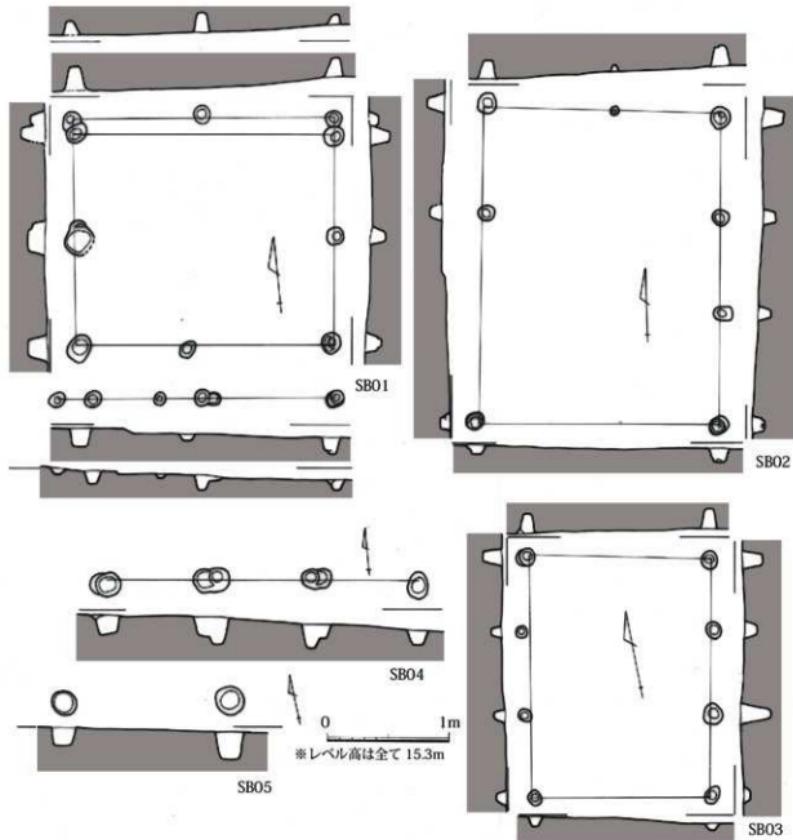


図5. 挖立柱建物実測図 (1/80)

SB03 1間×3間を復元した。南北軸はN-10°・E。南北長4.0m、東西長2.9mほどである。

SX04 SB001の北側に平行した柱列で底としては柱位置が合わず、間隔がやや近いが柵の可能性も考えておきたい。

SX05 調査区北端、道への落ち際に平行して径45cmほどのピットが並ぶ。調査区外北側に展開する可能性がある。

2区

現状は小山状の頂部に広がる不整な平地で、一部は近年まで畠地として使用されていたという。経緯で触れたように、通報で現地を確認したときにはすでに花崗岩の石材が重機で取り出されていた（写真11）。古墳であることは石材の規模・数等からは十分推測され、施工者による写真には石材が組まれた状態が写っており（写真12）古墳であることは確実であった。工事ではさらに掘削が行われる計画であったため、残存する石室の掘方、墓道の記録を行った。現地は花崗岩風化土を地山とし、調査時には1.2mほどが削平を受けた状態である。

1号墳

石室 挖方と一部残存する床面を確認した。挖方は平面長方形で $8.2m \times 6.2m$ を測り、深さ185cmほどが残存していた。墓道部に地表からの掘り込み面が確認できる部分があり（写真19）、深さは270cm以上であったことがわかる。挖方の壁は直に近い。中心軸はN-52°Eで石室は南西に開く。石室は玄室前の仕切石と考えられる柱状の玄武岩が残り、また墓道側に一部残存する敷石から複室構造と考えられる。

床面は玄室の仕切石部分のごく一部、前室の北西側にのみ敷石が残る。石材は花崗岩の10~30cm大の礫で挖方の床より15cmほど浮いた状態である。前室敷石上に須恵器壺蓋1点(1)が出土した。挖方の一部には重機による概乱も見られる。玄武岩の仕切石は長さ120cm、厚さ25cmほどの6角柱で、10cmほど浮いた状態である。すでに掘り出された石材に長さ1m前後の柱状の玄武岩が2石あり、前室と墓道の間などに配されていたものと考えられる。

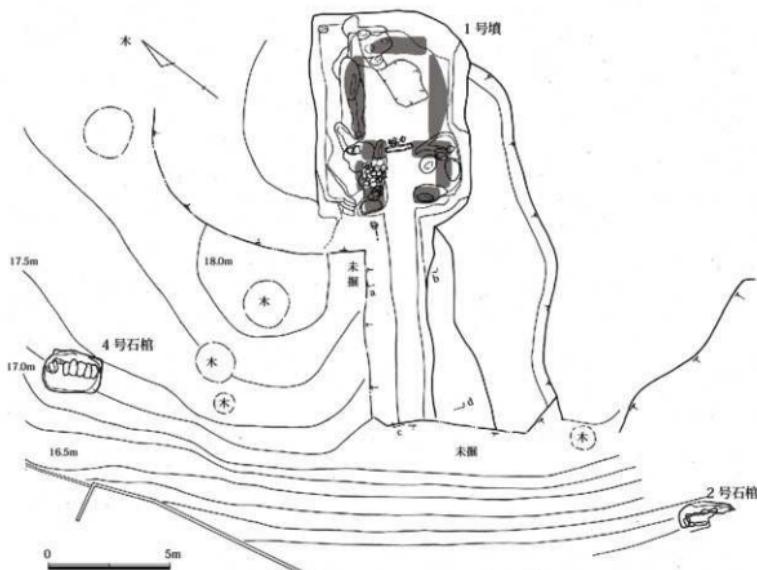


図6. 2区1号墳実測図(1/200)



図7. 墓道土層実測図(1/80)

- a-b
 - 1. 明赤褐色土
 - 2. 黒色～暗褐色土(赤褐色土ブロック含む)
 - 3. 明褐色土 4. 暗灰褐色土 5. 黑褐色土
 - 6a. 明褐色土に暗灰色土ブロック多く混ざる
 - 6b. 明褐色土に暗灰色土ブロックわずかに混ざる
 - 7. 明褐色土 8. 黄褐色土
 - 9. 灰灰褐色土に明灰褐色土ブロック混ざる
 - 10. 黑褐色土 11. 灰灰褐色土に褐色土ブロック混じる
 - 12. 明褐色土にバイアン土ブロックわずかに混ざる
 - 13. 明褐色土

- c-d
 - 1. 明赤褐色土 2. 赤褐色土
 - 3. 明赤褐色土 4. 明褐色土
 - 5. 黑褐色土に褐色土ブロックわずかに混ざる
(a-b土層の2, 4層)
 - 6. 灰灰褐色土に褐色土ブロック混ざる 7. 灰褐色土
 - 8. 灰灰褐色土に明褐色土混じる
 - 9. 明褐色土
 - 10. 明褐色土
 - 11. 明褐色土にバイアン土ブロックわずかに混ざる
 - 12. 明褐色土

石室の規模は床面に残ったくぼみ、敷石などから玄室が長さ 3.5 m、幅 2.7 m、前室は長さ 1.2 m、幅 2.7 m ほどを想定した(図 7)。また石室の石材の配置について、掘出された石材と掘削時の写真からおよそ以下のように推定復元した(図 6)。玄室の側壁は両側とも長さ 3.5 m ほどの 1 枚の石材からなり、左側が高さ 1.5 m、右側は 1 m ほどである。奥壁には幅 2.2 m、高さ 1.8 m ほどの石材を配し、袖石は左側が 0.8×0.9 m、高さ 1.9 m、右側は 0.8×1.6 m、高さ 1.9 m の立石を配す。前室の袖石は 1.1×0.9 m、高さ 2 m ほどの石材、または

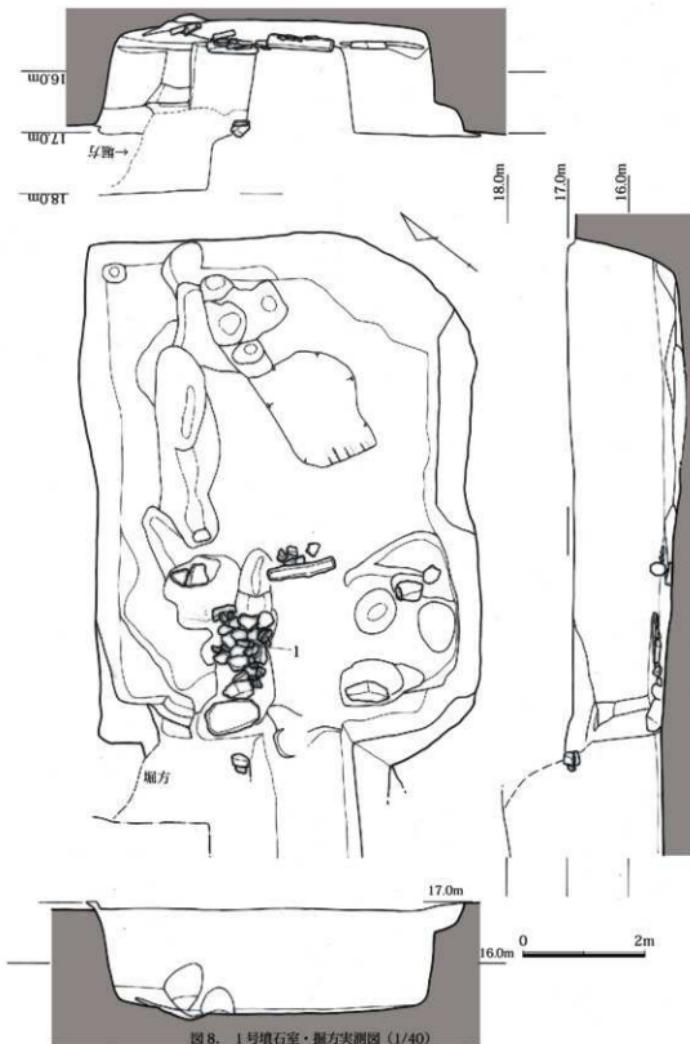


図 8. I 号墳石室・掘方実測図 (1/40)

数段の石材を積んでいたことが推定される。前室の袖石は墓道に接し、墓道掘方には側壁に石を組んだ痕跡、余地はなく明確な渓道部はないと考えられる。

墓道 南西方向に直線的に伸びる墓道 8.5 mほどを確認した。西側はさらに 3~4 mを未掘のまま残存している。床面の高さは石室玄門部と同じで、西端は標高 8.5 mで 20cmほど下がり、幅 1.2~1 mほどである。掘方東側は床から 50cm~1 mは急に立ち上がるが、上部および西側の立ち上がりはやや緩やかである。西側の掘方は工事が及ばないため未掘で保存されている。覆土は明褐色土を主とし、断面 a-b の 2、4 層に暗灰色土が見られ、c-d の 5 層に対応する。遺物は少なく、土師器高杯(7)が a-b の 6 層で出土したほかは上部層で青磁(8)が出土したくらいである。床付近にも遺物は見られない。

2号石棺墓 1号墳南側、墓道入口から 7 mほどの位置にある。工事用の道路掘削時に出土し、蓋石、南側の側石、小口は失われている。棺内の規模は長さ 180cmほどが復元でき、幅 16cmほどである。側壁の石材は長いもので 65cmと他より棺内は高めである。遺物は出土していない。

3号石棺墓 1号墳の東 16 mに位置する。表土掘削工事中に出土し、蓋石の一部が動いている。棺内は長さ 188cm、幅は南西側が 40cm、北東側が 30cmを測る。小口の北東側は 2 枚を配す。側壁は密着して組まれ、幅 18cmと厚手のものがあり、全体に 2 号石棺墓より大きい。蓋と側石の間には所々に粘土を敷いている。掘方の底から 10cmほどで両端部に 5~20cm 大の礫を敷いたレベルがありここを床面ととらえた。両端に一部粘土が見られ、南東側には上から床まで粘土が貼られていた。また北東側床面直上には粗砂が見られた。遺物は出土していない。

4号石棺墓 1号墳の西に位置し、墓道入口から 1.2 mほどに当る。工事で表土を 5、60 cm掘削し出土した。南から 2つ目の蓋石は動いたものを復元している。北側 2つ目に当る位置にも石があった痕跡がある。石棺は長さ 162cm、幅 20~26cmを測る。石材は花崗岩で幅 10~16cmほどでやや丸みを帯びた感がある。掘方床面は小口部分に 15cmほどの掘り込みがあり、側石は石材ごとに掘り込むものもある。明確な床面は確認できなかった。遺物は出土していない。

出土遺物 2 区では遺物は少なく遺構に伴うものはほとんどない。以下、特に記載がないものは重機による搅乱土を含む表採品である。1から 5 は須恵器である。1 は 1号墳前室の敷石上出土の环蓋である。石室内で原位置に近い遺物はこの 1 点のみである。口径 13.0cm で天井部にへら記号を書く。2 は提瓶か。外面ナデ調整。3 は 1/4 からの復元で口径 6.4cm を測り頸部に波状紋を施す。



写真1. 2号石棺墓周辺 (北西から)

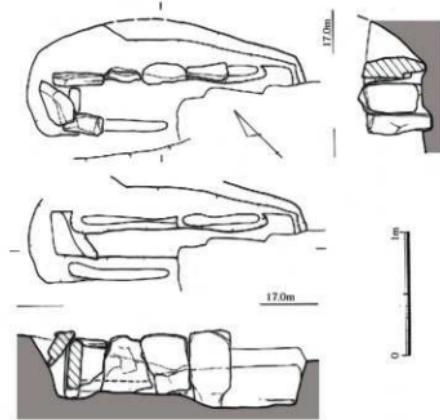


図9. 2号石棺墓実測図 (1/40)



写真2、3号石棺墓（北東から）

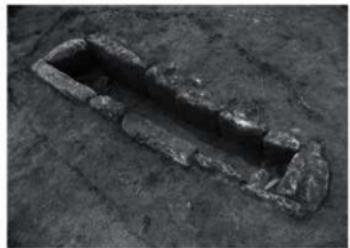


写真3、3号石棺墓（東から）



写真4、4号石棺墓（南西から）



写真5、4号石棺墓（南西から）

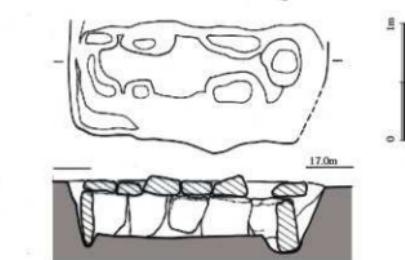
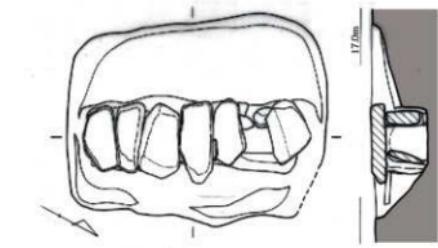
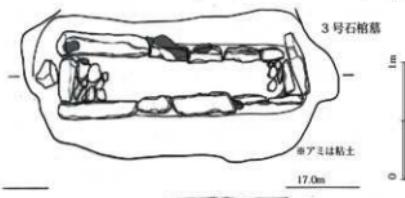
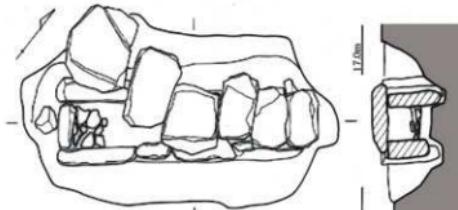


図10. 3、4号石棺墓実測図(1/40)

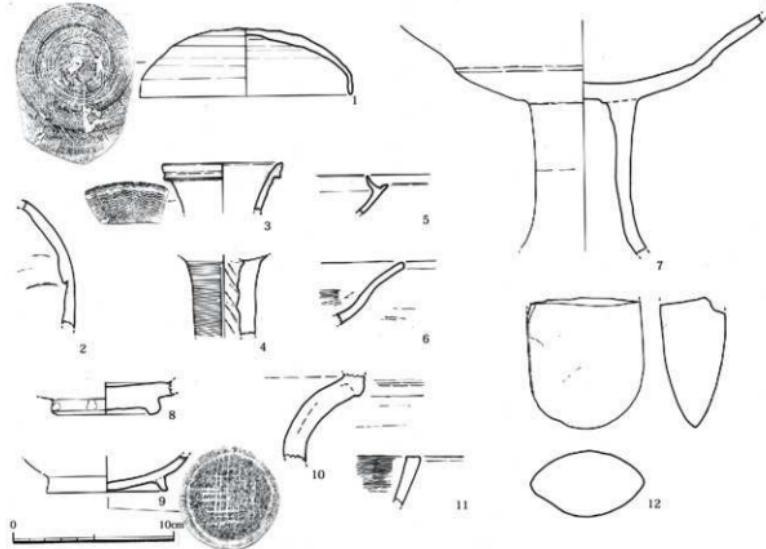


図 11. 2区出土遺物実測図

す。4は高環の脚で透かしが見られるが破片のため詳細不明。5は墓道部分の表土出土の环身片。6は土師器の高环か。器面は荒れるが研磨調整が残り体部に横方向の砂粒の動きが見られる。胎土は細かく精良。7は墓道出土の土師器の高环で器面は荒れる。8は青磁碗の底部で緑灰色の釉がかかり覆付の一部は露胎。墓道上部出土。9は土師器の碗で胎土がきめ細かい。外面底に碁盤目状の切り込みが見られる。10は弥生土器か。小型の金海式壺形が想定される。焼きが固い。11は土師質の鉢で内面に刷毛目が見られる。石室壙方内の覆土出土である。12は玄武岩製の石斧で古墳西側での表採。このほか黒曜石片3点を採集した。

3区

対象地北東側の平坦地に位置する。丘陵頂部とは6mほどの高低差がある。試掘の結果、緩斜面に遺構を検出し特に北側に多く確認している。今回の計画では盛土後の利用がなされるため遺構面への影響はなく現状保存される。ただし北端の道路拡幅が行われる部分23mについて、確認した遺構の記録を行った。遺構面は北側の道路のレベルから20~30cmほどの攪乱土壤および暗灰褐色土を除去した明黄褐色土上面で、東へ緩やかに下がる。ただし、南側の平坦面とは東端で1mほどの高低差があり、試掘調査では明黄褐色土より上20cmほどの灰褐色土上面でも遺構を確認している。

今回はピットを中心とした遺構を確認した。ピットは東西方向に並ぶように確認できるものが多いが、調査区が狭く建物を把握することができない。図には見通しを重ね、およその深さ、位置関係を示した。ピットからは土師質、瓦質土器、青磁等の小片が出土している。数点を図化した。13はSP04出土の瓦質の鍋で内面に刷毛目、外面なで暗灰色を呈す。14はSPO2出土の白磁の底部で体部を打ち欠く。わずかに黄色掛った釉で外面は露胎である。15は染付皿片で口径9.8cmを測る。外面に波瀾文・三角文、見込に草葉を描く。16、17は試掘時の出土。16は土師皿片で口径13cm程度か。17は土師器の鉢で橙色を呈す。18、19は土鍤で胎土は細かい。

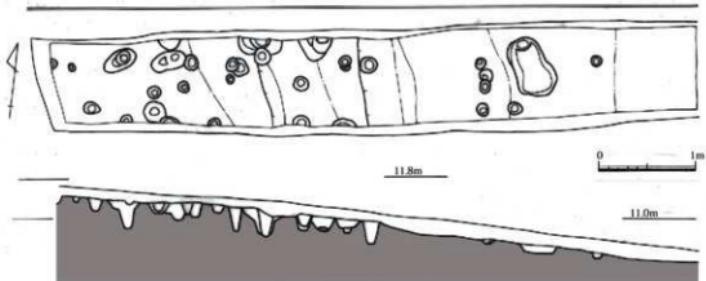


図 12. 3区遺構配置図 (1/50)

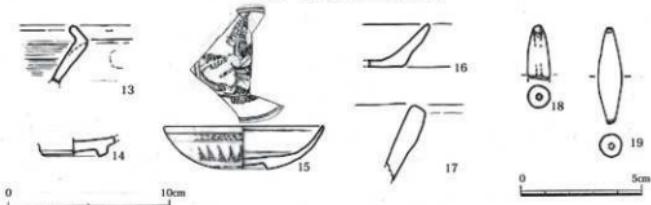


図 13. 3区出土遺物実測図 (1/3・1/2)

18はSP9、19は試掘時の出土である。この他に象嵌青磁の小片が出土している。また、黒曜石の石核1点、剥片1点が試掘時に出土している。

小結

2区の1号墳は、掘方とわずかに残った床面と持ち出された石材から複室構造の石室を復元した。想定した規模はあくまで推定ではあるが、大型の石室であることは確かである。時期は出土した壺蓋と遺構などから7世紀初頭前後と考えられる。2、3、4号石棺墓は遺物の出土がなく時期が不明確だが、1号墳を囲むように位置しており、同時期または、やや後出すると想定できよう。

1区では建物跡、3区でも建物等の遺構の広がりを確認した。3区の遺構は出土遺物から15・16世紀代と考えられ、1区の建物も近い時期を想定しておきたい。丘陵の先端部に築かれた館跡等の機能などが想定されよう。丘陵は西側にも緩斜面が広がっており、この時期の遺構が広がる可能性がある。また、削平された古墳があることも考えられよう。また、少量の遺物のみだが弥生時代中期初めにさかのぼる遺物も出土しており、この時期の遺跡の広がりも予想される。

最後に、繰り返しになるが、2区1号墳の墓道入り口部と墓道北西側は未掘で残存している。また3区の平坦面は試掘で遺構を確認し、盛土により保存されている。



写真6. 調査前(北東から)



写真7. 1区全景(南東から)



写真8. 1区(西から)



写真9. SB01, SB02(南から)



写真10. 2区調査前(北から) 1区から望む



写真11. 墓石出石された石室石材



写真12. 工事中 玄室袖石部分か(南西から)



写真13. 調査中 石室掘方全景(南西から)



写真 14. 石室掘方全景(西から)



写真 15. 玄室から墓道側を望む(北東から)



写真 16. 床面遺存状況(南西から)



写真 17. 前室敷石(東から)



写真 18. 玄室仕切り石:玄武岩(南西から)



写真 19. 墓道掘方未掘部分(北東から)



写真 20. 3区西半(南西から)



写真 21. 3区東半(西から)

1627 麦野C遺跡第16次(MGC16)

所在地 博多区麦野6丁目14-1

調査原因 共同住宅

調査期間 2016.9.20～2016.11.2

調査面積 361m²

担当者 松崎友理

処置 記録保存

調査の概要

麦野C遺跡は御笠川の西岸を南北にのびる雑餉隈の丘陵上に立地する。第16次調査地点は遺跡中央に位置し、現地表面の標高は18m前後を測る。

遺構検出は表土から5～25cm下の鳥栖ローム層上面で行った。遺構は調査区南西側に集中し、竪穴住居跡3軒、土坑3基、ピットなどが検出された。住居跡はいずれも調査区外に抜がっているため、全体の大きさは把握できていないが、平面プランはすべて方形を呈している。調査区南端にある住居跡では壁溝が2条見つかり、土の堆積状況から建替を行い、規模を拡張したことが確認された。床面からは鉄製鎌が1点出土した。この竪穴住居は出土土器から弥生時代後期前半に比定される。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0050 S=1/4000)



2. 調査区全景 (東から)

1628 弥永原遺跡第13次(YNB13)

所在地 南区日佐3丁目126-1

調査原因 宅地造成

調査期間 2016.9.26～2016.12.6

調査面積 338m²

担当者 中尾祐太

処置 記録保存

調査の概要

本調査地点は、遺跡の北端、丘陵の最先端部付近に立地する。本調査地点の地形は、西側が高く、東、北にかけて落ちており、大半の遺構は西側の高所で検出している。調査では弥生時代前期後半～末の貯蔵穴を2基と甕棺墓5基、土坑墓2基を検出した。貯蔵穴はいずれも現地表面から3m程度の深さで残存しており、残存部から断面形は袋状を呈すると考えられる。甕棺墓は、削平および搅乱によって全体が分かれるものが少ないが、確認できるものには覆い口式の他、倒置棺を確認している。本調査地点では墓と貯蔵穴に切りあいがなく、遺物を詳細に比較する必要があるが、周囲の調査結果を含めて考えると、両者は共存していたのではなく、まず貯蔵穴群が一帯に設けられ、その後が埋没した後に墓域として使用されたようになった可能性が強い。



1. 調査地点の位置 (26 上日佐 0105 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南西から)

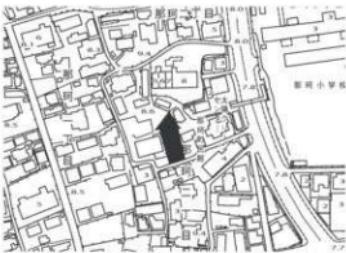
1629 那珂遺跡群第 167 次 (NAK167)

所在地 博多区那珂 2 丁目 56, 64-2, 64-3 他
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.9.26 ~ 2016.11.8
 調査面積 170m²
 担当者 山本晃平
 処置 記録保存

調査の概要

第 167 次調査地点は那珂遺跡群の東端に位置している。遺構は竪穴住居 2 軒、溝 1 条、多数の柱穴・ビットが確認された。竪穴住居は調査区中央でおよそ南北に並んで 2 軒検出された。2 軒とも方形を呈し、規模は約 3m × 4m を測る。出土土器から古墳時代後期頃の住居と考えられる。溝は調査区北側に位置し、北東 - 南西方向に延びている。幅は 1.8 ~ 2m、深さは約 1.3m であり、断面は V 字状を呈する。茶臼や陶磁器などが出土していることから中世と考えられる。多数ある柱穴の配置から調査区西側で柱穴列を確認できた。柱穴列の年代は、溝と同じく中世と考えられる。

遺構の年代から古墳時代と中世の大きく 2 つの時期に集落が営まれていたことがわかる。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南から)

1630 元寇防塁第 12 次 (GKB12)

所在地 西区大字今津地区内
 調査原因 史跡整備
 調査期間 2016.11.4 ~ 2017.2.10
 調査面積 55.5m²
 担当者 蔵富士 寛
 処置 現状保存

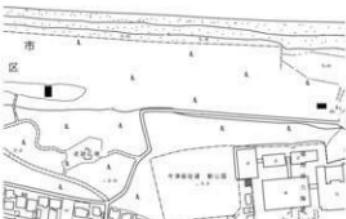
調査の概要

調査地点は、国史跡元寇防塁（今津地区）の指定地東端部近くに位置する。

第 12 次調査では、1・2 区の 2 か所で発掘を実施した。石塁の現状確認を目的とする確認調査であることから、石積みの上面を検出するに留めている。

1 区では、検出した石塁が、両外縁のみに石を積み上げ、内側には砂を充填する構造であることが判明した。

2 区では、遺構上面の検出に留め、長さ 6m 分、幅 2.5m の石塁を確認した。なお、石塁の検出時、両区とも白磁片などが少量出土している。



1. 調査地点の位置 (117 今津浜 0116 S=1/4000)



2. 調査区全景 (東から)

1631 福岡城下町遺跡第2次 (FUM2)

所在地 中央区大名2丁目291番

調査原因 集合住宅

調査期間 2016.11.7～2016.11.8

調査面積 87m²

担当者 清金良太

処置 記録保存

1. 調査に至る経過

平成28年6月7日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号28-2-185）。平成28年8月1日に申請地の試掘調査を行ったところ、近世後期と考えられるピット等を検出した。用途面積130m²の共同住宅建設によって、遺構が壊される87m²を調査対象地とした。

発掘調査は2016年11月7日から調査区の掘削作業を開始し、同年11月8日に作業を終了した

2. 位置と環境

福岡城下町遺跡は福岡市中央区に所在し、博多湾沿いに形成された海岸砂丘（箱崎砂丘）上に位置している。また、

福岡城は南西側の大休山から延びる丘陵上に築かれている。

福岡城の城下町は江戸時代から続く市街地であるため、福岡

城・肥前堀・中堀に伴う調査以外は調査が行われてこなかっ

た。江戸時代以前の遺跡の存在がよく分かっていない地域で

はあるが、浜の町公園内で行われた警固断層確認調査では縄文時代早期の貝塚が発見され（浜の町貝塚）、福岡市役所で行われた肥前堀の調査では弥生時代の遺物が堀内から発見されるなど、周辺に遺跡が広がる可能性も指摘されている。

3. 調査の記録

第2次調査では、江戸時代末から近世にかけて土坑が2基、井戸1基、その他ピットが数基出土した（図3）。



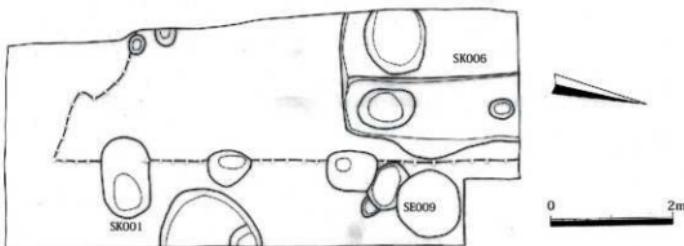
1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 2889 S=1/4000)



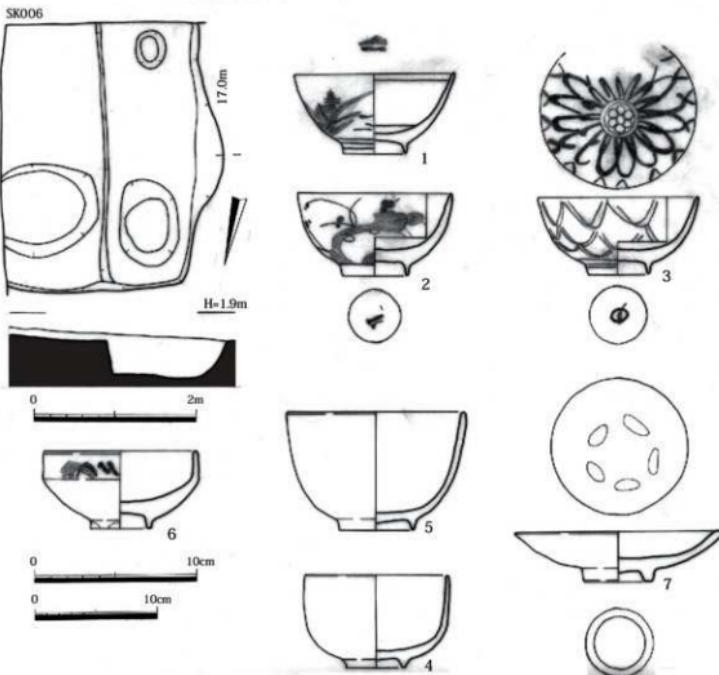
2. 調査区全景



3. 第2次調査地点位置図



4. 遺構実測図 (S=1/80)

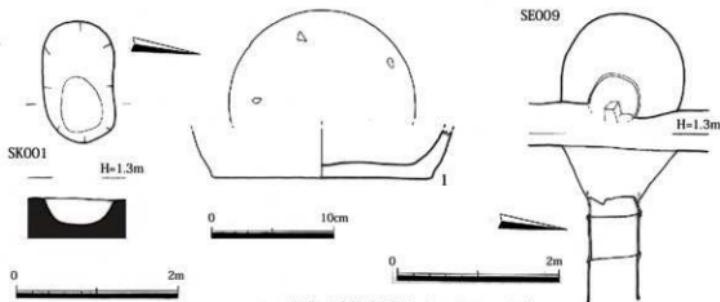


5. 遺構・遺物実測図 (S=1/60・1/3・7のみ 1/4)

1) 土坑 (SK)

SK006 (第4図) 北西部で検出した。東側が30~40cmほど落ちている。土層は均一の淡黒茶褐色であり、ここから陶磁器の碗、皿が出土した。

出土遺物(図5)1~4は肥前系の磁器碗である。1は口径9.8cm、底径3.9cm、高さ4.8cmを測る。見込に「●」、外面は草花文である。2は口径9.6cm、底径4cm、高さ5.1cmを測る。外面は草花文、高台内には文様が確認できる。3は波佐見系くらわんか手碗で、口径9.8cm、底径3.7cm、高さ4.7cmを測る。内面には菊、外面は二重綱掛文がみられる。高台内に篆書文字が描かれる。4は白磁の碗である。口径9cm、底径3.9cm、高さ5.9cmを測る。5、6は陶器の碗である。5は口径11cm、底径4.6cm、高さ7.2cmの大振りの碗である。内外面ともに茶色の釉薬が掛けられ、底部は露胎である。6は京焼の陶器碗で、口径9.2cm、底径3.9cm、高さ4.8cmを測る。



6. 遺構・遺物実測図 (S=1/60・1/3)

外面は鉄絵で塗を描き外底部は露胎である。7は陶器の皿である。口径 17.2cm、底径 5.6cm、4.2cm を測る。内面見込には目跡がみられる。

S K 0 0 1 (図 6) 南東部で検出した。土層は淡黒茶褐色であり一部焼土を含んでいた、大きさは 74 × 44cm、深さ 16cm を測る。

出土遺物 (図 6) 1 は近世の甕である。底径約 18.2cm を測る。

S E 0 0 9 (図 6) 近代以降の井戸である。陶製の井戸粧を持ち、径は 65cm を測る。人力での掘削は途中で断念した。陶磁器、擂鉢、瓦辺などが出土したが、図化できなかった。

4. 小結

今回の調査では江戸時代後期と考えられるのが S K 0 0 6 のみに留まった。福岡城下町遺跡の解明にはもう少し調査次数を重ねる必要がある。

1632 那珂遺跡群第 168 次 (NAK168)

所在地	博多区那珂 2 丁目 17-16, 17-17
調査原因	専用住宅
調査期間	2016.12.1 ~ 2017.1.31
調査面積	145m ²
担当者	屋山洋
処置	記録保存

調査の概要

168 次調査地点は遺跡中央の南西部に位置する。調査では弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴式住居 1 軒が出土した他、弥生時代中期から中世にかけての溝、土坑、柱穴群が出土した。溝は竪穴式住居の周溝の可能性がある。ロームの状態からある程度削平を受けていると判断されるが、柱穴群の分布密度は濃く、深さも 50cm を越える柱穴が多い。竪穴式住居は 1 辺が 5 m の方形で、ベッド状遺構を持つ。炉の可能性がある焼土痕は建物中央の他に壁際 2ヶ所で検出した。ベッドは削り出しとローム盛土の両方があり、削り出しのベッドもその上に若干の盛土を追加し、盛土のベッドは一度低床部より深く掘り下げた後に盛土を行ってベッド状遺構を築くなど、その構造は複雑である。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0085 S=1/4000)



2. 調査区全貌 (北から)

1633 比恵遺跡群第 147 次 (HIE147)

所在地 博多区博多駅南 4 丁目 132-1
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2016.12.1 ~ 2017.1.30
 調査面積 225.32m²
 担当者 木下博文
 処置 記録保存

調査の概要

比恵遺跡群は西の那珂川と東の御笠川にはさまれた標高 5 ~ 8 m の中位段丘上に展開する弥生 ~ 古墳時代の集落遺跡である。本調査地点は、遺跡範囲の北東端に近く、旧地形では東隣の山王遺跡との間にある南北の谷が西に入り込む。その北岸に当たる。現況で標高 6 m 前後を測る。

調査区北半では、現地表下 130cm で褐色の鳥栖ロームを基盤とする台地となり、南に向かって緩やかに白色の八女粘土を基盤とする谷となる。台地部では弥生時代後期から古墳時代後期の井戸 9 、弥生時代後期の小屋掛け竪穴建物 1 、古墳時代後期以降の東西溝 1 、ピット 90 を検出した。谷部では 7 世紀代の須恵器蓋杯など多量の土器破片を含む暗茶褐色粘土層を検出した。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南から)

1634 五十川遺跡第 21 次 (GJK21)

所在地 南区五十川 2 丁目 251-1, 251-2, 251-3, 251-4
 調査原因 宅地造成
 調査期間 2016.12.12 ~ 2017.1.31
 調査面積 126.1m²
 担当者 山本晃平
 処置 記録保存

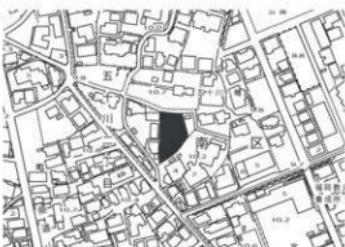
調査の概要

五十川遺跡は、福岡平野の中央部にある南北約 800m 、東西約 240m の独立台地に立地している。本調査地点は台地の東部に位置し、第 3・4 次調査地点の北側となる。

検出遺構は、竪穴住居 5 軒、掘立柱建物 1 棟、溝 2 条、井戸 1 基、ピットなどである。竪穴住居は調査区北側に 1 軒、中央部に 2 軒、南側に 2 軒検出した。

出土遺物から弥生時代終末期から古墳時代前期頃と思われる。溝は調査区の北側と南側でそれぞれ検出した。北側の溝は古代、南側の溝は明確な時期は不明だが、中世と考えられる。井戸は調査区北側で検出した。平面形は円形で、径 2.3m 、深さ 1.6m である。出土遺物から 8 世紀頃と思われる。

以上から、弥生時代終末期から古墳時代前期と古代、中世の 3 時期にかけて集落が営まれていたと思われる。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0088 S=1/4000)



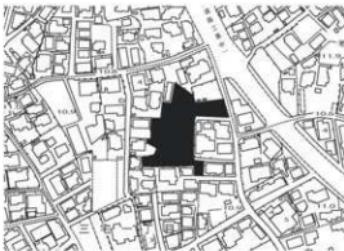
2. 調査区北半全景 (北から)

1635 大橋 E 遺跡第 13 次 (OOE13)

所在地 南区三宅 1 丁目 717 番 2 号 16 筆
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2017.1.5 ~ 2017.3.3
 調査面積 487m²
 担当者 松崎友理
 処置 記録保存

調査の概要

第 13 次調査地は大橋 E 遺跡の中央部南側に位置する。標高約 10.4 m で遺構を検出した。調査区内の層序は上から表土・褐色粘質土・明褐色粘質土・地山である。調査区内における地山は基本的に黄色シルトであるが、調査区西側と北東側では褐色砂質土となる。検出遺構は井戸 4 基、土坑 4 基、溝 6 条、ピットである。井戸は近現代のものを 1 基含む。調査区北東で検出された井戸は直径約 3.5 m を測り、井戸側には結桶を用いていた。出土した土器片などから 12 世紀代の井戸と推定される。調査区の中央では南北方向に流れる溝が 4 条検出されている。溝の切り合いからこの 4 条の溝よりも東西方向に流れる溝の方が古いことがわかる。調査区の中央を南北に流れる溝でから弥生時代中期前半の土器片や黒曜石などが出土した。



1. 調査地点の位置 (39 三宅 2382 S=1/4000)



2. 調査区全景（東から）

1636 博多遺跡群第 208 次 (HKT208)

所在地 博多区店屋町 41 番, 42 番
 調査原因 共同住宅
 調査期間 2017.1.16 ~ 2017.3.21
 調査面積 109m²
 担当者 井上蘭子
 処置 記録保存

調査の概要

第 208 次調査地点は博多浜北側砂丘の中央やや南寄りに位置する。遺構面は 3 面設定した。第 1 面は、中世～近世以降の井戸、土坑、溝状遺構が検出された。近世井戸の中に井戸側を石組で形成するものがある。近世の遺構を中心とする。第 2 面では、中世の井戸、土器溜まり、柱穴などを検出した。13 ~ 15 世紀頃である。第 3 面は基盤砂丘上である。上面の掘り残しが主体となり、井戸の井筒や底面はこの面で検出している。また、包含層や遺構埋土から古代の須恵器が出土しており、生活時期は古代までさかのぼると考えられる。

本調査地点は、古代から近世に至るまで集落が形成されており、特に中世から近世以降にかけて井戸が掘削された箇所であったと想定される。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/4000)



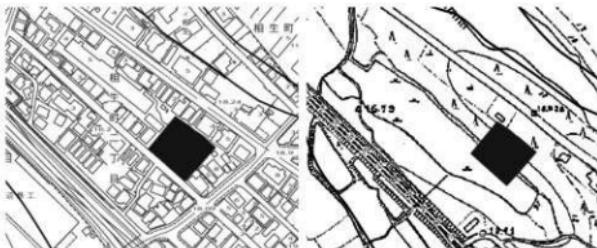
2. 調査区北半全景（南から）

1637 南八幡遺跡第20次 (MHM2)

所在地	博多区相生町2丁目26番1	調査面積	128m ²
調査原因	共同住宅	担当者	荒牧宏行
調査期間	2017.1.23～2017.2.6	処置	記録保存

1. 位置と環境

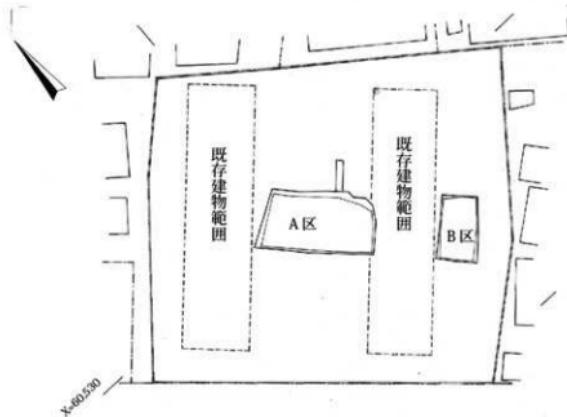
調査地点は北辺の境界にほぼ沿った方向で南西に派生する中位段丘面の南側斜面に位置する。その細い丘陵の尾根線を調査区北側の現行道路が貫通している。南側の線路周辺は谷部となり、西側の須玖の丘陵と対峙している。



第1図 調査地点の位置 (25井戸 0051 S=1/4000) 左:現在 右:昭和初期

2. 調査区の設定

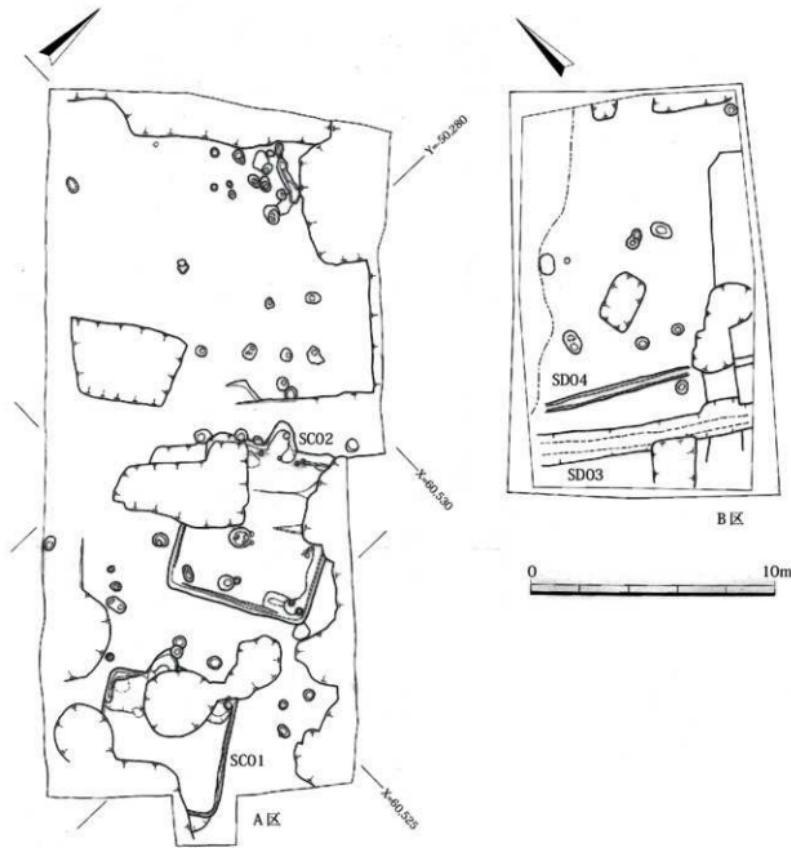
試掘調査によれば、敷地北辺側は段状に削平され、遺構が消滅している。また、南辺側は急に下降し、地山のロームはグライ化する。敷地内の既存建物部分は遺構面が破壊され、遺構の残存は皆無である。従って、開発は全域に及ぶものの調査区は中央の既存建物の間を中心にしていくことにした。調査区は2地点を設定し、表土を剥ぎながら遺構の広がりをみて範囲を限った。なお、便宜上設定した2地点の西側をA区、東側をB区とする。



3. 基本層序

現在のGLは17.2mを測る。包含層は無く、現代客土で整地されている。遺構検出面であり地山のローム面はA区北側で16.9m、南側で16.4mを測り、南側に下降していく。

第2図 調査範囲図 (S=1/600)



第3図 遺構配置図 (S=1/100)

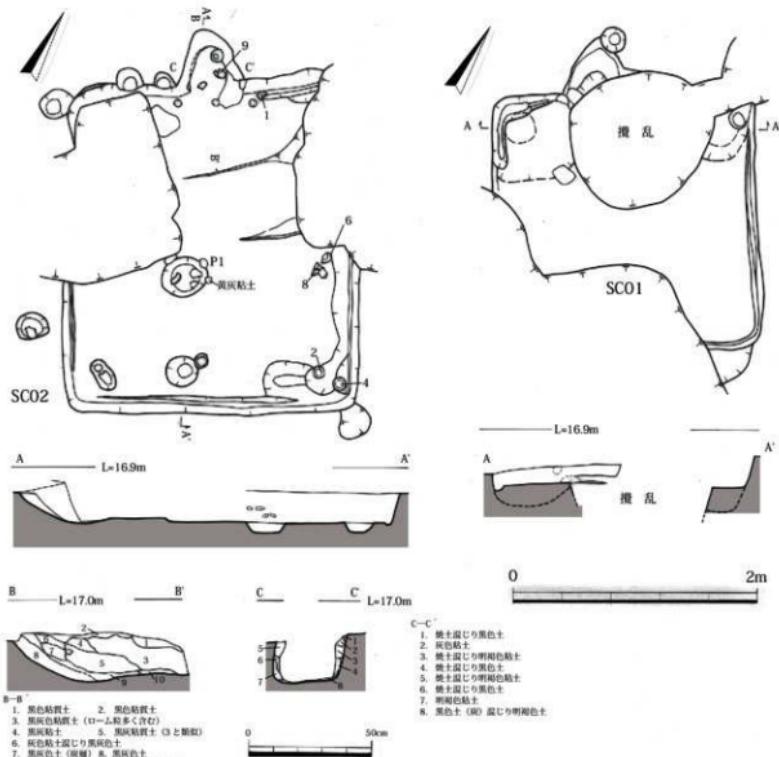
4. 検出遺構

主な遺構は A 区では主軸を同じくした 8 世紀後半代の竪穴住居跡 2 軒、B 区では現代まで継続して機能した水路 1 条、時期不明の小溝 1 条である。

A 区

SC01

調査区東際で検出された。1 辺が 2.7m の正方形に近いプランである。主軸方位は SC02 とほぼ同じの N-33°-W をとる。壁高は約 25cm を測る。壁溝は北辺側では深さ 3cm 程度を検出したが全周しない。主柱穴は竪穴内では検出されず、隅角 2箇所が貼り床土を埋土にして窪む。北西辺の中央に煙道が突出したカマドを設置している。突出部分の主軸長は 65cm を測り、竪穴部と接する部分に袖部とみられる黄灰色粘土が一部残る。



第4図 竪穴住居実測図 (S=1/50)

カマドの突出部は残りが良好である2、3次調査で判明したように竪穴内に入るものと考えられる。

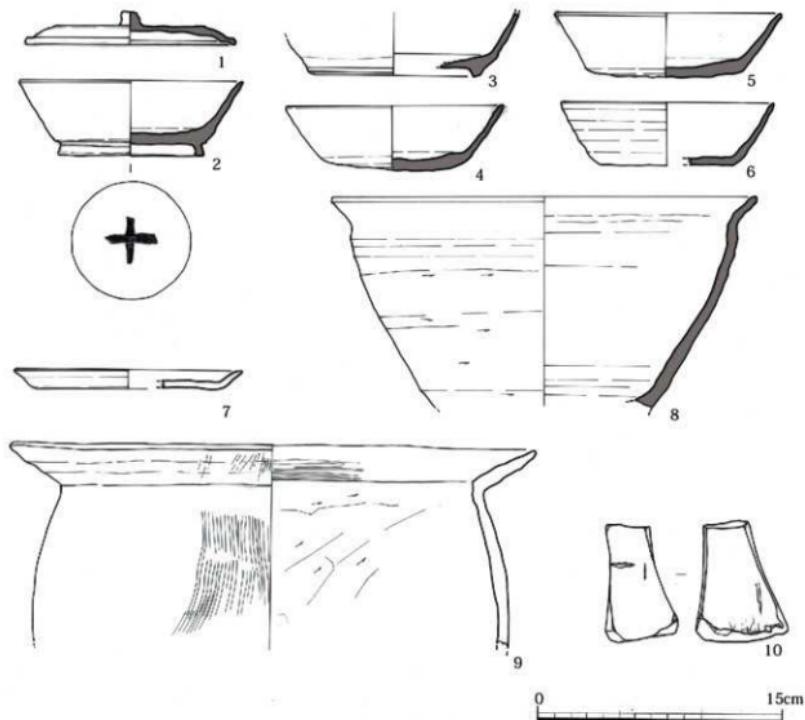
出土遺物は細片のみで、図示できるのは10の砂岩製砥石のみである。

SC02

SC01の西側に縦列した配置で検出された。南北の主軸長3.45m、東西長3.05mの長方形プランを呈す。壁高はSC01と同じく25cm程度が残る。主柱穴は明確ではないが、南辺の隅角と中央部2箇所に柱穴が検出された。南東隅角の落ち込みの上部に須恵器2と4が完形で置かれていた。P1の上部には灰色粘土が散布していた。カマドは最下に炭層が堆積し、上層に崩壊した壁体の灰色粘土を含む層が堆積する。



写真. 1 A区全景（南西から）



第5図 出土遺物実測図 (S=1/3)

この炭層の範囲は水平にした主軸長で 135cm を測る。壁体は煙道部壁面および竪穴部に焼土や炭が混じった灰色粘土や明褐色粘土で構築した袖部を検出した。

出土遺物（1～9）

7 と 9 は土師器、他は須恵器である。2 と 4 は完形で南東隅角から出土した。2 の外底部には「十」の墨書きを有す。8 は赤褐色を呈した須恵器鉢である。9 はカマド内から出土した土師器壺片である。出土遺物の時期は 8 世紀後半代とみられる。

B 区

下降した南端で水路の下底部である幅 40cm、深さ 30cm の溝 SD03 と幅 20cm、深さ 8 の溝 SD04 を検出した。いずれも立ち上がった上端は広がり、SD03 の埋土は SD04 付近まで広がっていた。SD03 は昭和初期の地図に記載されている（第1図）ことから、現代まで機能していたことが判る。SD04 は時期が不明であるが、SD03 と平行していることから近い時期の可能性がある。

まとめ

現在までに南八幡の丘陵に形成された 8 世紀後半代の竪穴住居を主体とする集落の西際が把握できた。また、丘陵の地形も明らかになってきた。

1638 博多遺跡群第 209 次 (HKT209)

所在地 博多区冷泉町 465 番

調査原因 事務所ビル

調査期間 2017.2.1 ~ 2017.12.28

調査面積 1,000m²

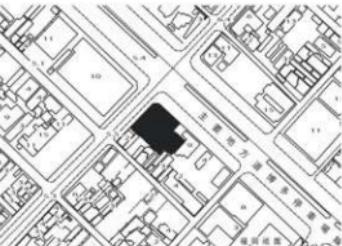
担当者 屋山洋・佐藤一郎

処置 記録保存

調査の概要

第 209 次調査地点は博多浜砂丘の北側に位置する。調査では弥生時代終末の壺棺墓を初現として古墳時代初期の土抗、古代の溝や井戸、中世前半期・後半期の井戸や溝と多数の土抗を確認した。土抗のほとんどは廃棄土抗であり、炭化物と灰が交互に堆積するものや陶器片が多量に廃棄されたもののほか、鹿や牛や海豚等の動物遺体を廃棄したものがみられる。遺物はコンテナケース 600 箱分の土師器・貿易陶磁器類や金属製品・動物遺体などが出土した。

第 209 次調査地点は博多浜砂丘の裾部に位置し、西に向けて遺構密度がやや疎らとなる。また、廃棄物を処理する遺構が多く検出されることから、居住域からは外れた範囲に相当すると推測される。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S=1/4000)



2. 調査区全景 (南西から)

1639 博多遺跡群第 210 次 (HKT210)

所在地 博多区祇園町 385, 386, 387 の一部他 7 筆

調査原因 納骨堂建設

調査期間 2017.2.1 ~ 2017.6.22

調査面積 360m²

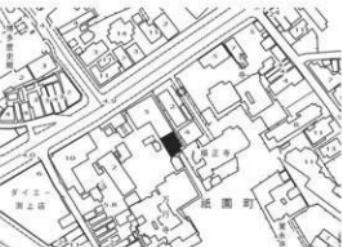
担当者 木下博文

処置 記録保存

調査の概要

調査地点は、遺跡の南西部に位置し、最も内陸の砂丘の西侧頂部にあたる。北側隣接地で 3 次、45 次調査が実施され、中世の大溝や陶器鉢に入れられた銅錢などが検出されている。今回の調査では、平安時代末期の井戸・土坑、鎌倉時代初頭の東西方向の大溝を検出した。

遺構からは、完形の土師器皿、白磁や龍泉窯系・同安窯系青磁の碗・皿を中心とする中国産陶磁器、中国製銅銭や皇朝十二銭、鉄釘など金属製品、石球・碁石など石製品、牡蠣の殻や動物の骨など有機質遺物が多量に出土している。また遺構は少ないが、包含層から弥生後期～古代の遺物も多数出土しており、特に古墳時代前期の土器、古代の鉢具が注目される。出土遺物の総量はコンテナ 123 箱におよぶ。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S=1/4000)



2. 調査区全景 (北から)

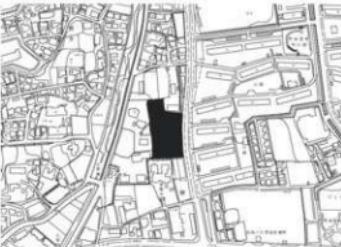
1640 野方久保遺跡第6次 (NKU6)

所在地	西区野方1丁目128番1, 143番1, 150番1
調査原因	店舗建設
調査期間	2017.2.6 ~ 2017.6.9
調査面積	1026m ²
担当者	山本晃平
処置	記録保存

調査の概要

第6次調査地点は野方久保遺跡の最北端に位置する。検出遺構は掘立柱建物3棟、溝5条、井戸2基、土壙墓1基、他柱穴・ピットなどである。建物1は4間×1間分見つかり、1辺1m以上ある柱穴で柱痕跡も明瞭に残存していた。建物の時期は古代である。溝は弥生時代中期頃の自然流路で、弥生土器、石器類が多く出土した。中世の濠と考えられる溝は断面が逆台形となり、幅約4m、深さ約1.6mをはかる。井戸は、井戸側として木桶3段分を使用し時期は中世。土壙墓の時期は中世で青磁碗、鉄刀、土師器皿が副葬されていた。

遺構・遺物の状況から本調査地点では弥生時代中期、古代、中世と大きく3時期にわたって、集落が営まれていたことが判明した。



1. 調査地点の位置 (91 橋本 0369 S=1/8000)



2. 調査区全景 (東から)

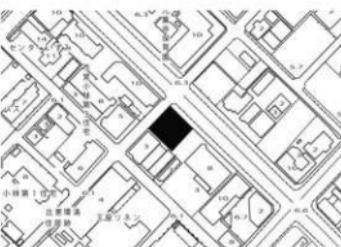
1641 比恵遺跡群第148次 (HIE148)

所在地	博多区博多駅南4丁目102番1
調査原因	業務所建設
調査期間	2017.2.7 ~ 2017.4.5
調査面積	449.5m ²
担当者	中尾祐太
処置	記録保存

調査の概要

第148次調査地点は、遺跡中央の東側丘陵際に所在する。基本層序は表下に旧水田層および床土が堆積しており、現地表下90cm前後で地山面の八女粘土層を検出している。調査区南はやや高いが、北にいくにしたがいゆるやかに落ちている。顕著な生活の痕跡は認められないなか、東西方向の溝を1条検出している。本遺構は、北側の低地部分が遅くとも弥生時代中期後半までに埋没した後に掘削されたもので、弥生時代後期～古墳時代初期にかけて数回の掘り直しを行なうながら継続している。覆土からは土器片が多量に出土しており、本調査地点で出土した土器の大半は本遺構からの出土である。

溝は周辺調査地点で検出されている「大溝」との関係も想定され、性格も含めて詳細に検討する必要がある。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/4000)



2. 調査区全景 (北東から)

1642 井相田A遺跡第3次 (ISA3)

所在地 博多区井相田3丁目14番3
 調査原因 専用住宅
 調査期間 2017.2.6 ~ 2017.2.8
 調査面積 43.31m²
 担当者 池田祐司・中園将祥・清金良太
 処置 記録保存

調査の概要

第3次調査地点は、遺跡範囲の南側、標高14mほどの現在の集落域に位置する。周辺での調査事例はないが、確認調査で古代、中世の遺構が確認されている。

表土の黒褐色土30~50cmを除去した暗灰色砂質土上面が遺構面となる。土坑1基、溝状遺構2条、井戸2基、ピットなどの遺構を確認した。溝状遺構は2条とも西へ向かって伸びる。井戸は2基が切り合い、井桁は確認できなかった。

遺物は瓦器碗、土師器壺、白磁碗が溝状遺構、井戸を中心に出土した。溝状遺構からは五輪塔が出土している。

11世紀末から12初頭の集落の一端を確認した。周辺で実施された確認調査の結果から、現在の集落域を中心に中世初めの集落が広がると考えられる。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0052 S=1/4000)



2. 調査区全景 (西から)

1643 比恵遺跡群第149次 (HIE149)

所在地 博多区博多駅南4丁目123-1
 調査原因 社屋建設
 調査期間 2017.2.20 ~ 2017.3.31
 調査面積 97m²
 担当者 荒牧宏行
 処置 記録保存

調査の概要

第149次調査地点は台地上に位置し、遺構面は鳥栖ローム層で標高5.5~6.0mを測る。

検出された主な遺構としては、柱穴のほか8世紀代の溝1条、現代まで利用された水路1条である。8世紀代の溝は幅60cm、深さ40cmの支線水路とみられ、枝分かれした溝も検出された。この8世紀代の溝と現代の水路は平行して字縁を走行し、古代より水路が連絡し築かれていたと考えられる。この現代水路を境にローム層は比高差40cmで段落ちし、弥生~古墳の遺構はこれによって削平され、柱穴が2箇所検出されたことにとどまる。段落ちしたロームの上層は畑耕作土とみられる褐色土が堆積し、下降していく東側ではグライ化した粘土と畦溝が検出され、水田として利用されたことがわかる。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S=1/4000)



2. 調査区全景

1644 清末遺跡第5次 (KYS5)

所在地 東良区四箇4丁目13-7（老松神社内）
 調査原因 学術調査
 調査期間 2017.2.23～2017.2.28
 調査面積 16.0m²
 担当者 桃崎祐輔（福岡大学）
 処置 現状保存

調査の概要

老松神社境内で2016（平成28）年5月に不時発見された火葬藏骨器（蓋：龍泉窯青磁束口碗、身：褐釉陶器壺）を埋納する中世墳墓の全容を把握するために確認調査を実施した。藏骨器の周辺には礫群の露出が認められることから、集石墓の可能性が考えられる。

老松神社は標高25m前後の微高地上に位置しており、集石墓が営まれた14世紀代には集落の縁辺部に位置していた可能性が考えられる。



1. 調査地点の位置 (94 金武 0341 S=1/4000)



2. 集石墓全景

1645 箱崎遺跡第82次 (HKZ82)

所在地 東区箱崎1丁目2469
 調査原因 店舗兼住宅
 調査期間 2017.3.1～2017.5.16
 調査面積 200m²
 担当者 加藤隆也・服部瑞輝
 処置 記録保存

調査の概要

第82次調査地点は箱崎遺跡範囲の北側に位置する。調査では包含層とピット・円形土坑・井戸等約300基などの遺構を検出した。その暗茶褐色砂の下に砂丘地山である黄白色の砂質土を検出し、この地山面からもピット・不定形土坑を僅かながら検出している。遺構面の標高は2.5～3.0mの間に落ち着く。傾斜などの明確な地形変化は確認できなかった。

遺物は土器がコンテナケース約15箱。施釉後口縁部口禿げの白磁碗片、龍泉窯青磁が出土している。その他出土した土師器皿もほぼ底部糸切りのものであり、直径も10cm前後のものから8cm以下の小皿が多い。いずれも13世紀後半～14世紀初頭頃のものと思われる。銅製品は円形土坑などから銅鏡が計14点が出土した。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/4000)



2. 調査区全景

1646 那珂遺跡群第 169 次 (NAK169)

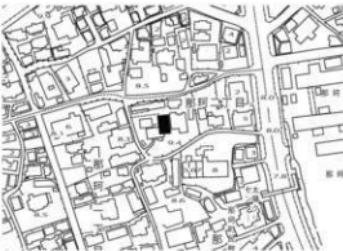
所在地 博多区那珂 3 丁目 17-6, 17-8, 17-12
 調査原因 専用住宅
 調査期間 2017.3.13 ~ 2017.3.27
 調査面積 133m²
 担当者 朝岡俊也・中園将祥
 処置 記録保存

調査の概要

那珂遺跡群は御笠川・那珂川間の洪積台地上に展開する。
 第 169 次調査地点は、遺跡中央部の南東部に位置する。

調査は 133m² の狭い範囲を対象として行ったもので、検出した遺構は古代の井戸 1 基と中世の井戸 1 基、弥生時代から中世までの柱穴である。特に古代の井戸は径 2.5m、深さ 3.5m に及ぶもので、木製井戸側が存在した可能性が高い。井戸の底付近から完形の皿と甕が出土した。

遺物はコンテナース 5 箱分が出土した。調査区周辺は過去の開発により大きく削平を受けた範囲に含まれており、調査成果からもこれが追認できた。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0085 S=1/4000)



2. 調査区全景 (西から)

1647 大牟田古墳群 A 群第 4 次 (福大) (OMK-A)

所在地 南区柏原 1 丁目 1251 番その他
 調査原因 学術調査
 調査期間 2017.3.6 ~ 2017.3.26
 調査面積 51.7m²
 担当者 桃崎祐輔 (福岡大学)
 処置 現状保存

調査の概要

大牟田古墳群は 43 基の古墳と製鉄遺構から構成される遺跡で、昭和 40 年代に福岡市によって調査が実施されている。

今回の確認調査は、昨年度に引き続き A 群の 1 号墳と 3 号墳について実施している。A - 3 号墳については、墳丘構造・規模を把握するためトレンチ調査を実施し、径 13m 程度の円墳であることを確認した。石室については前庭部にトレンチを設定し、追葬回数の確認などを行っている。

A - 1 号墳の石室開口部西側で確認された供獻器群は、近年の土砂流出により遺構崩壊の可能性が考えられたことから、トレンチを設定し土器群の配置や構成内容の把握などを行った。



1. 調査地点の位置 (54 柏原 0187 S=1/4000)



2. A-3号墳トレンチ調査

8916 博多遺跡群第49次 (HKT49)

所在地 博多区上川端 272・273
 調査原因 駐車場建設
 調査期間 1989.5.18～1989.5.31

調査面積 90m²
 担当者 加藤良彦
 処置 記録保存

調査の概要

1. 位置と環境

本調査区は、博多浜・息浜砂丘間西入江の博多浜側西斜面に位置し、周辺では第72・87・124・159次調査が実施され、12世紀以降埋立が実施され15世紀以降を中心に生活域として活用された区域に立地している。現地表面で標高3.7mを測る。調査時に事業者により地表下2mの標高1.7～1.8mまで鋤取られており、灰褐色砂質土上で遺構が検出されこれを上面とし近世から15世紀代の遺構を、40cm下の標高1.3～1.4mの黄灰～灰色砂上で15世紀代の遺構を検出し下面としたが、明確な時期差が見いだせないため、図上は同一面で重ねている。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/4000)

2. 検出遺構・遺物

近世の土壤7基(SK1・2・3・6・8・10・11)・井戸2基(SE9・12(瓦井戸))、15世紀代の土壤8基(SK5・14・15・16・17・18・19)・溝1条(SD13)・銅熔解炉底1基(SH20)、16世紀代の土壤1基(SK7)を検出した。

遺物はコンテナ18箱分出土した。中心となるのは15世紀代の銅鑄造関連遺構と遺物で、熔解炉底SH20はじめ全ての遺構で関連遺物を検出している。関連遺物は近世混入を含め、鍋・鏡・飾金具・仏具等の鋳型375片、炉壁約500片以上、輪羽口60片、取瓶42片、炉底他滓約400片と、多量に検出している。

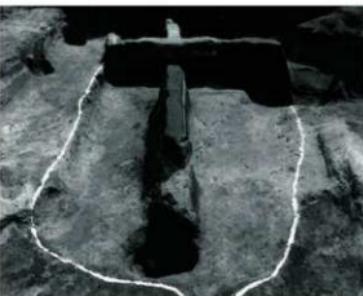
近世では肥前系陶磁器の他上野高取系陶器・博多七輪・火鉢・土人形(唐子・犬・鈴)等が出土した。1)銅熔解炉底SH20 B3グリッドに位置し、溝SD13に切られる。3.5×a×1.5m深さ40cmの長方形プランで、主軸をN-38°-Eにとり、これは上屋の方向を示す。内部に2～5cm厚で、炉壁や鋳型を碎いた焼土塊・灰褐色粘土質・灰褐色砂質土を交互に、断面中央上位に厚10cm前後の黄灰色砂を敷き詰め、地山砂からの防湿を図っている。試掘ではこの検出面のさらに40cm上方で焼土と大型の炉底滓が検出されており、炉体は床面から1m近く上方に設けられたと考えられる。出土した炉体の径が40cm以下であるので、数基併設が可能である。

出土遺物

遺構に大きな時期差が見受けられないため銅鑄造関連遺物はまとめて後述する。1は龍泉窯系の端反皿で、口径11cm。



2. 調査区上面全景 (南東から)



3. 炉底 SH20 (北東から)

外底は甚簡底で壇付以外に施釉するが高熱で釉が泡だっている。2は文琳形の茶入で径5cm。内外に黒褐釉を施す。3は土師器环で口径14cmを測る。

2) 廃棄土壙 SK14・16

SK14はB2グリッドに位置しSD13に切られる。径1.08m深さ66cmの円形二重土壙で上位に多くの鋳型・輪羽口片と鉄箸が出土している。7は土師質片口捏鉢。口径30.2cmで内面に左上がりのハケメが残る。8は滑石石鍋。口径34cmで外面に横位の槌目が残る。SK16はC1グリッド下面で、炉壁・鋳型・銅製品等を出土した。1.22×0.8m深さ20cmを測る。15は大海形の茶入で径5.8cm。外面の黒褐釉に灰オーリープ釉が重れる。内面は濃胎で赤褐色。16・17は土師器皿・环でいずれも外底は糸切り。16は口径8.5cm高1.5cm。17は口径12.5cm高2.9cm。3は土師器环で口径14cm。18～22は銅製品。18は鬼面の小型銅吊手受部。19は轡の半分。引手とハミの連結部を引き延ばして分解している。20～22は「開元通寶」「祥符通寶」「政和通寶」の唐・北宋錢。

3) 廃棄溝 SD13

B1・2グリッドに位置し14・20を切る。幅4m深さ75cmを測り下位に炭灰が、上位に焼土塊が厚く堆積し、多くの鋳型片・炉壁が出土する。23は青白磁小碗。見込みに陽刻印花文を施す。24は瀬戸卸皿。25～28は土師器环・皿。29は滑石石鍋。口径21.8cm。

4) 包含層他出土遺物

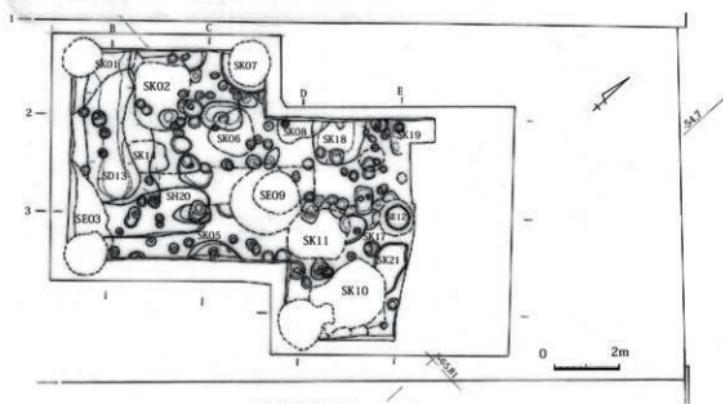
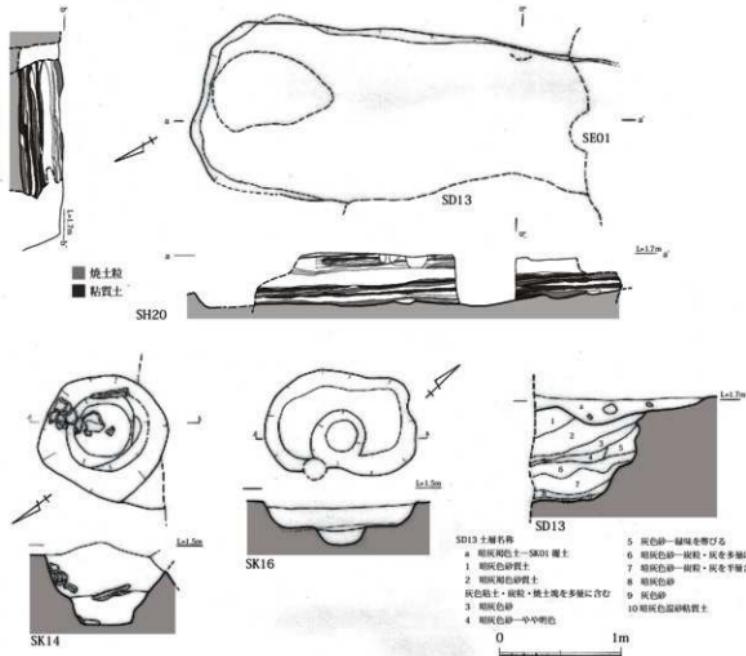
43は朝鮮陶器白地鉄絵碗。内面に黄白色化粧土後右上がりの螺旋に鉄絵を施す。外面上に胎土目が残る。44は口禿青白磁小碗。45は明代白磁端反皿。46は瀬戸卸皿。47は瀬戸小皿。53は「五銖」錢。54は石鍋片線刻人物像。頭部を三角に削り鳥帽子にみなし、以下に線刻で眉・目・鼻・口・輪郭・口髭・頬髭を表現する。74は瓦質湯釜。他に瓦質六角叢文風呂も出土する。75は瀬戸天目碗。

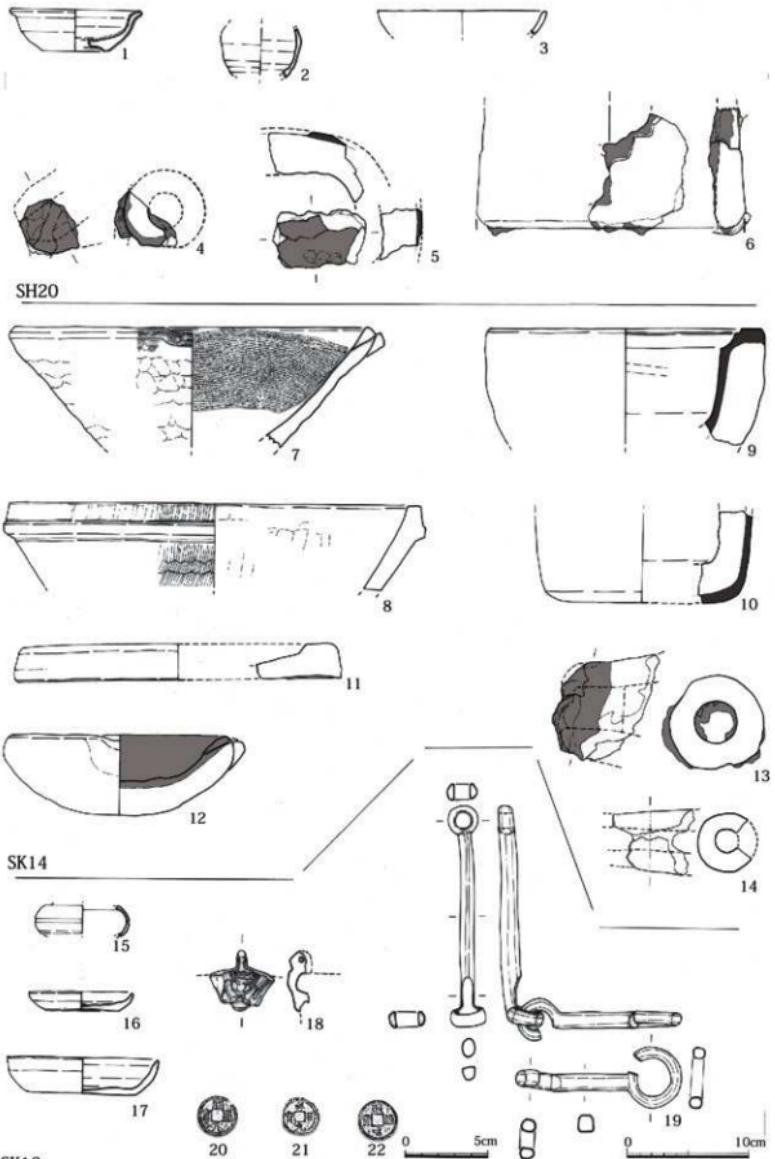
5) 銅鑄造関連遺物

炉壁・羽口・取瓶・鋳型粗型は粗い石英粒と多量の砂殻を含む粘土を用いており、図中鋳型の網掛けは真土を、炉壁等は器表の熔解・粒状に沸いている部分を示す。鋳型では9・10・30・31・32・33・35・36・61・62・63・79は鋸で31・33は片口。30の直口以外は口縁が二段に外反する。10・35・36・61・79は内型。いずれも板型挽きで真土を成形し一部に剥離剤の雲母粉が残る。11・57・59・60は円盤状の粗型に薄い真土で鏡背を成形する。34は高台皿か蓋、37は華瓶、58は跨口か。56は飾金具。64は「コ」状の板金具で真土が薄く残る。66は小物の粗型と思われる。55・65・67・68・69は中土のみの鋳型で真土は無い。55は仏像の背面で合わせ面の外周を窪ませる。65は轡19の可能性がある。67は脚の内型、68・69は脚合わせ型の内型である。炉壁で5は方形炉の隅小片。6は径21.4cmの小型炉。上位の羽口孔と断面下位から下端まで器壁が熔解し剥離する。70・71は炉体上部。ともに上端を弧形に抉り下5cm程と10cm程に径3cm程の火勢の調整孔を設ける。78は手捏ね製のこの蓋になる。70で径38.8cm71で35cm最厚4cmを測る。4・13・14・41・42は輪羽口で主体は先端7後端14長14cm程の後部が大きく聞く短いもので、内下面を水平位置に設置し、4・13・42は先端が炉底に接し熔解する。41は鋳型外型の転用品。14は径5cm前後の小型品。12・38・39・40・72・73・80は取瓶。いずれも小さな片口が付くと思われ径6～23cmと多岐にわたる。内面は高熱で厚く熔解し一部が赤銅色を呈し緑青が析出する。銅製品で48・49は緑金具50は釘51は一辺2.3cmの「匁」様の花文を鋳出す印。鉢が欠損する。52は瓶形の脚77は銅線を鍛造した茶杓。他に84次出土銅鍋と同様の三葉頭吊手受金具、鞘の切羽、表具の引手金具・裁金等があるが、大部分が破損する。

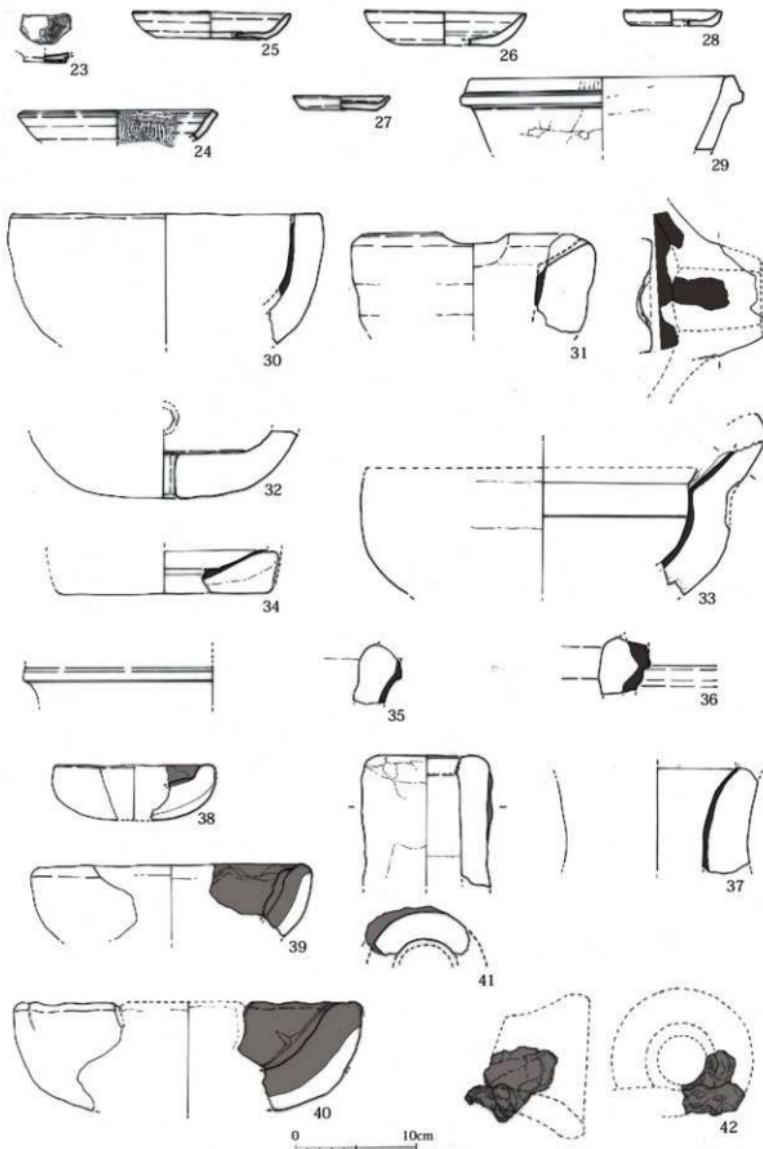
3.まとめ

本調査区では15世紀代の銅溶解炉・炉床と多数の銅鑄造関連遺物と廃棄遺構を検出した。35m北西の72

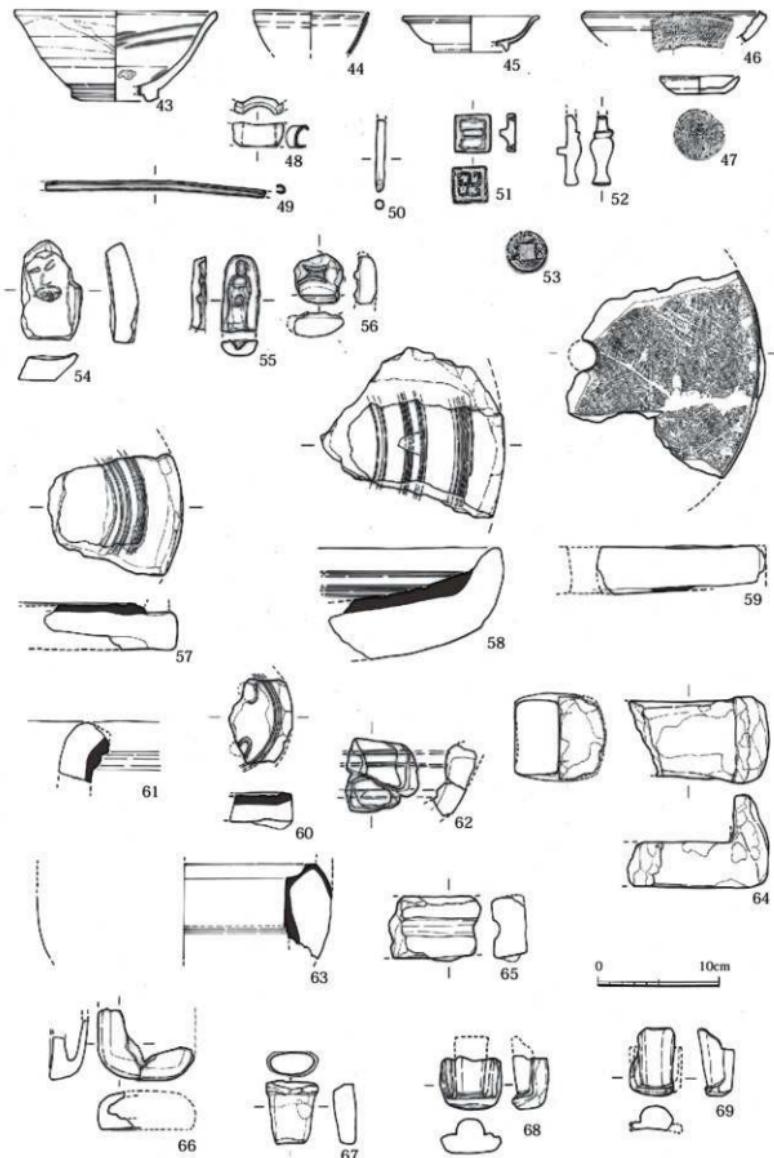
4. 遺構全体図 ($S=1/150$)5. SH20・SK14・16・SD13 実測図 ($S=1/40$)



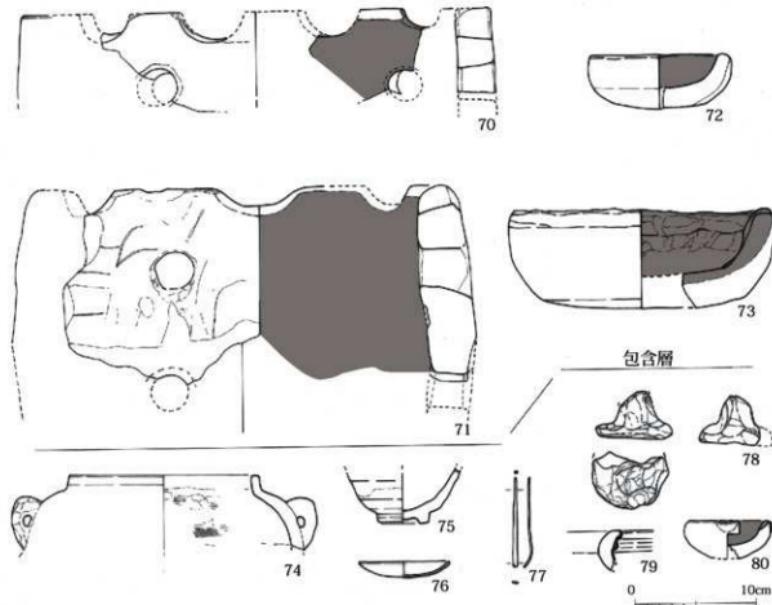
6. SH20・SK14・16 出土遺物実測図 (S=1/4、2・5・18・20～22—1/3)



7. SD13 出土遺物実測図 (S=1/4)



8. 包含層出土遺物実測図 (S=1/4、48~56-1/3)



8. 包含層・その他の出土遺物実測図 (S=1/4)

次調査で同形の銅鋳型を含む20片以上の鋳型が15世紀後半～16世紀頃の遺構から検出されており、一連の遺構群とすると15世紀後半に絞り込める。炉床は狭長で焼土粒・砂・粘土を交互に敷き詰めるもので、現在のところ本例のみと思われる。12世紀後半～13世紀初の62次2203号遺構が炉床の初例であるが、1.8m程の方形で10cmと浅く防湿は行っていない。4653号遺構は1.86×1.35m深さ57cmの楕円形で、2枚の炭層上に炉壁を含む多量の焼土が埋められており、構造的にはこれに近い。14世紀前半の97次SX216遺構は1.3×0.65m深さ55cmの土壤上位20cmに大量の礫を粘土シルトで埋め込んで防湿とする溶解炉の基部とされている。本調査区例はこれらを発展徹底したものと思われる。炉体では同じく62次2203号遺構から径50cmで上面を弧状に抉ったものが出土しておりこれも初例である。14世紀前半の97次でも同様の炉壁片が、同時期の80次では口縁下3cmと7cmの2段に径2cmの円孔を千鳥に穿つ炉壁片が出土しており本例はこの系譜上にある。枠殻を多量に含む取瓶は13世紀後半の61次で見られ以降本例まで鋳型粗型等多くの地点で確認されている。鋳型剝離剤の雲母粉は14世紀前半の97次で見られ本例まで続いている。三葉頭吊手受貝の銅鍋は12世紀後半の62・84次で初見され、本例まで300年間にわたる。鍋本体は12世紀口縁内折が13世紀後半～14世紀前半の139・148次で口縁外反に変わり本例までに至っている。このように12世紀後半以降15世紀後半に至るまで、鍋・仏具等小物の銅鋳造は同一系譜の技術者集団が実施している可能性が高い。また、本調査で出土した銅製品・小板・裁金は大半が破損・分解されており、鋳造素材の可能性が高い。14世紀前半の97次でも数点あるが小板・裁金が検出されている。

9554 博多遺跡群第92次(HKT92)

所在地 博多区冷泉町274の一部外9筆
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 1995.11.17 ~ 1995.11.28
 調査面積 185m²
 担当者 山崎龍雄・池田祐司
 処置 記録保存

調査の概要

調査地は博多遺跡群南西側、櫛田神社の裏側に位置し、標高は地表で約5mを測る。調査区西側は第80次調査区で、調査では弥生時代後期から各時代の遺構が検出されている。

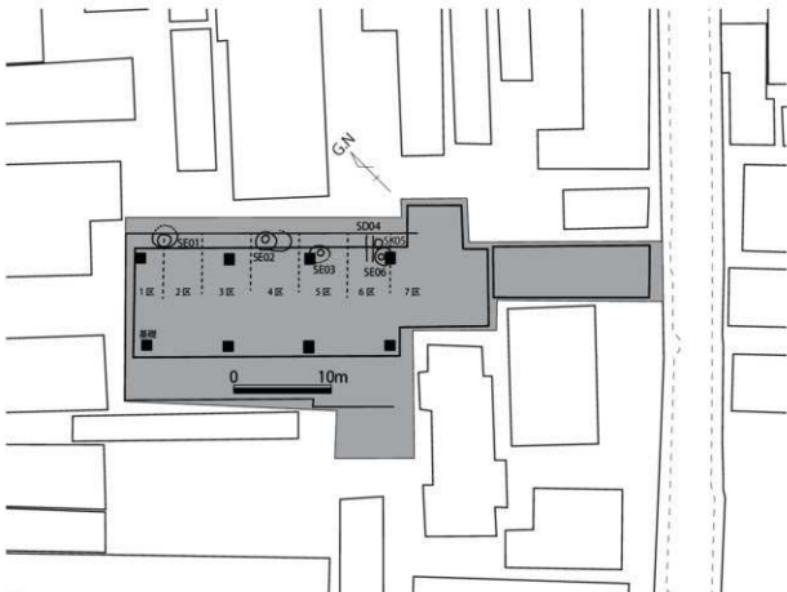
調査地の埋蔵文化財の事前照会を平成6年12月14日付、事前審査番号6-2-329で受けた。これを受け申請地が博多遺跡群内にあることから現地での試掘調査を行い、地表下4mで遺構を確認した。設計変更により工事による遺構の破壊が最小限に押さえられたが、地下駐車場部分は掘削が深く破壊が免れないため、杭打ち後の表土掘削時に立会調査を実施した。

遺構は地表下3.3m前後から確認でき、黄白色の砂丘面と合わせて2面の遺構面を確認した。調査区域は工事用地中梁で1区から7区まで設定した。主な検出遺構は溝、井戸、土坑などがある。輸入陶磁器については大宰府分類に拠っている。

以下主な遺構の遺物について述べる。陶磁器はいずれも中国産である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/4000)



第2図 第92次調査遺構配置概略図 (S=1/400)

遺構と遺物

SE 01(図3~5、写真2)

1・2区境で検出した円形井戸で井筒は桶組み。井筒径は0.8mを測る。

出土遺物：1～10は井筒内出土。1は土師器碗1/3片。口径16.6cm。2～8は白磁。2～6は碗。2は碗VI-2b類の1/2片。見込に櫛目文がある。口径15.7cm。3は碗VI-1a類の底部片、内面乳白色釉だが、表面粘土塊が残る。4は碗II-3b類1/3片、口径15.6cm。乳白色釉が内面から外面下部に掛る。

5・6は玉縁口縁碗IV類で、5はIV-1a類1/3片、口径17.6cm。6はIV-1b類の口縁1/3片。口径18.8cm。7・8は皿。7は皿II-1a類2/3片。口径11.8cm。8は皿VI-1a類底部片。

9・10は青磁碗。9は底部片。見込にヘラ切文がある。高台内に4か所の目痕が残る。10は初期高麗青磁碗1/2片。見込と高台費付に4か所の胎土目痕がある。口径16.8cm。

11～25は掘方井筒外出土。11は瓦器皿1/4片。外底はヘラ切後ナデ。口径11.2cm。12～15は土師器壺。外底部はヘラ切後ナデで、15の外底には板目が残る。口径は12・13が15.0cm、14は15.6cm、15は16.4cmを測る。16・17は土師器壺。16は2/3片。口径16.4cm。17は底部片。外面ヘラミガキ。内底は丁寧なナデ。18は瓦器壺底部1/4片。外面ミガキ、内面はナデ。19は青白磁皿。口縁部は輪花状を呈す。口径は10.4cm。

20～24は白磁碗。20～22は小さな玉縁口縁の碗II-1類。20は1/3片、21・22は1/2片。外底部は露胎。口径は18.2cm・15.8cm・16.0cm。23は底部片。費付に白色粘土が付着。24は碗III類1/3片。口径16.5cm。

25は盤底部1/4片。褐釉で外底部は露胎。

26～55は掘方上層。26～38は土師器。26～28は小皿。1/4～1/2片で、口径は9.0～11.0cm。外底部調整は26がヘラ切後ナデ、27・28は丁寧なナデで、27は板目が残る。29～38は杯。1/8～4/5片で完存はない。口径は15.0～16.0cm。杯としては大型。29～34は底部丸みが強い。外底部調整はヘラ切、ナデ。糸切はない。29・34・36は板状圧痕がある。33・34・37は口縁部一部煤が付着し黒ずむ。灯明皿か。

39は瓦器壺1/4片。調整は丁寧なヘラナデ。高台は貼付け。外面灰色、内面黒灰色。40～48は白磁。40は皿IV-2a類1/3片。口径10.6cm。外底はケズリで露胎。41・42は碗II-1類。1/2片で15.8・15.7cm。高台部露胎。43～46はIV-1a類。1/6～2/3片。口径は16.6～17.6cm、43・44の器高は6.4cm・6.9cm。外面体部下半～外底部は露胎。44の焼成はやや不良。47はV-4b類。1/4片で口径14.4cm。内面櫛目文。48はVI-1b類。高台内「尾」の墨書がある。49～51は底部片で外底部は露胎。52は鉢II-1類底部1/3片。外底部に墨書がある。53は天目碗2/3片。口径11.8cm。底部露胎。54は小型の仕上げ砥石。全長7.9cm。石材は頁岩。4面が使用面。時期はヘラ切底の土師器や白磁の形態、初期高麗青磁から11世紀後半から12世紀前半頃であろう。

SE02(図5)

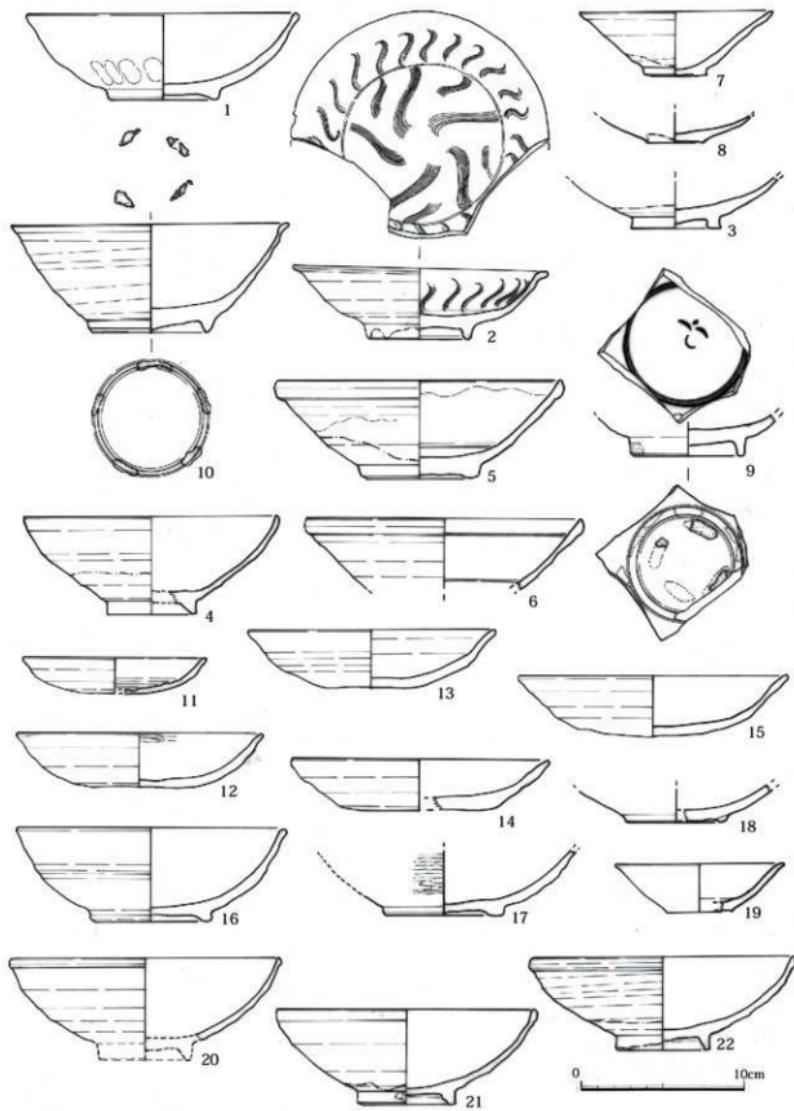
4区の壁際で検出した井戸。径0.7m程の桶組の井筒。井筒内埋土は黒褐色砂質土で下程黒く粘性が強く、礫石が多く出土。

出土遺物：60以外は井筒内出土。55～60は土師器。55・56は小皿。55は1/2片、57は完存。口径は8.2cm、8.9cm。外底部は回転糸切離し。57～60は杯。3/4片・1/3片・1/3片で、口径は12.1cm・12.6cm・12.9cm。外底部は回転糸切離し。

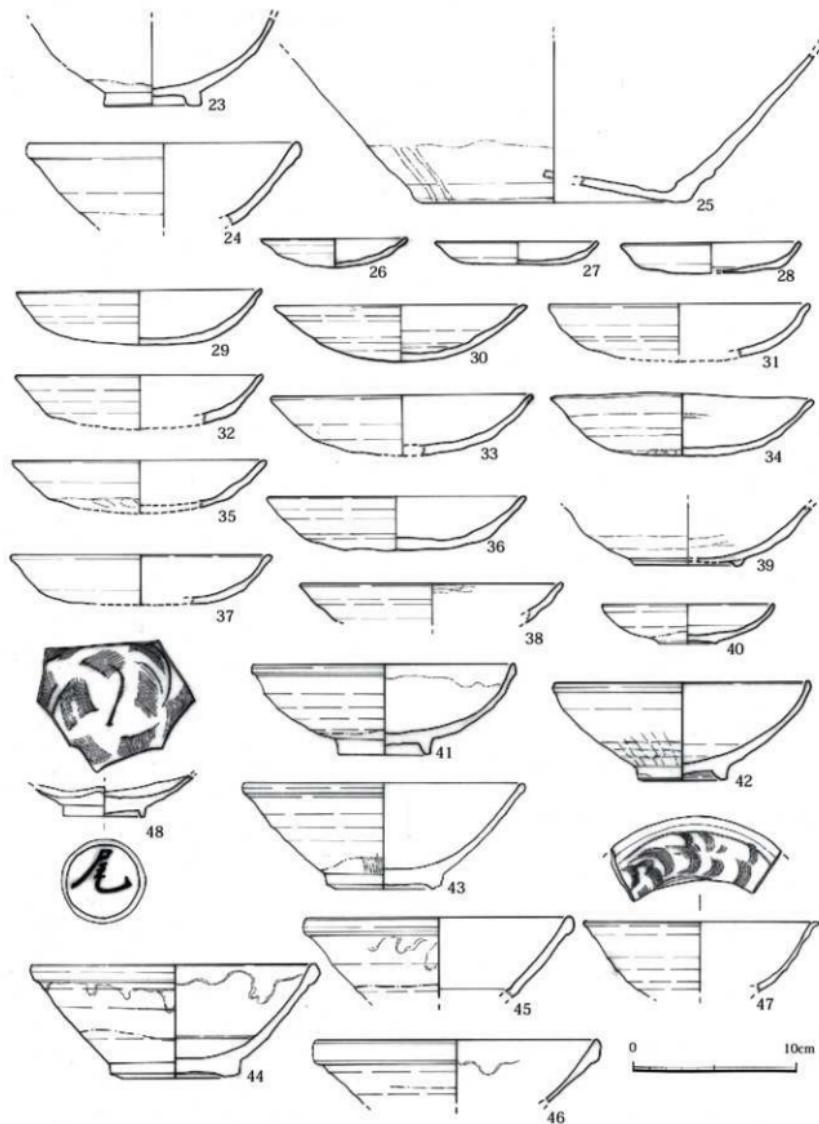
60は井筒外出土の土師器杯1/6片。口径16.2cmで大型。外底部はナデ。61は白磁碗II-1b類1/10片。口径15.6cm。外面彫り状の線文。遺構の時期は糸切底土師器の法量から見て13世紀頃か。

SE06(図5)

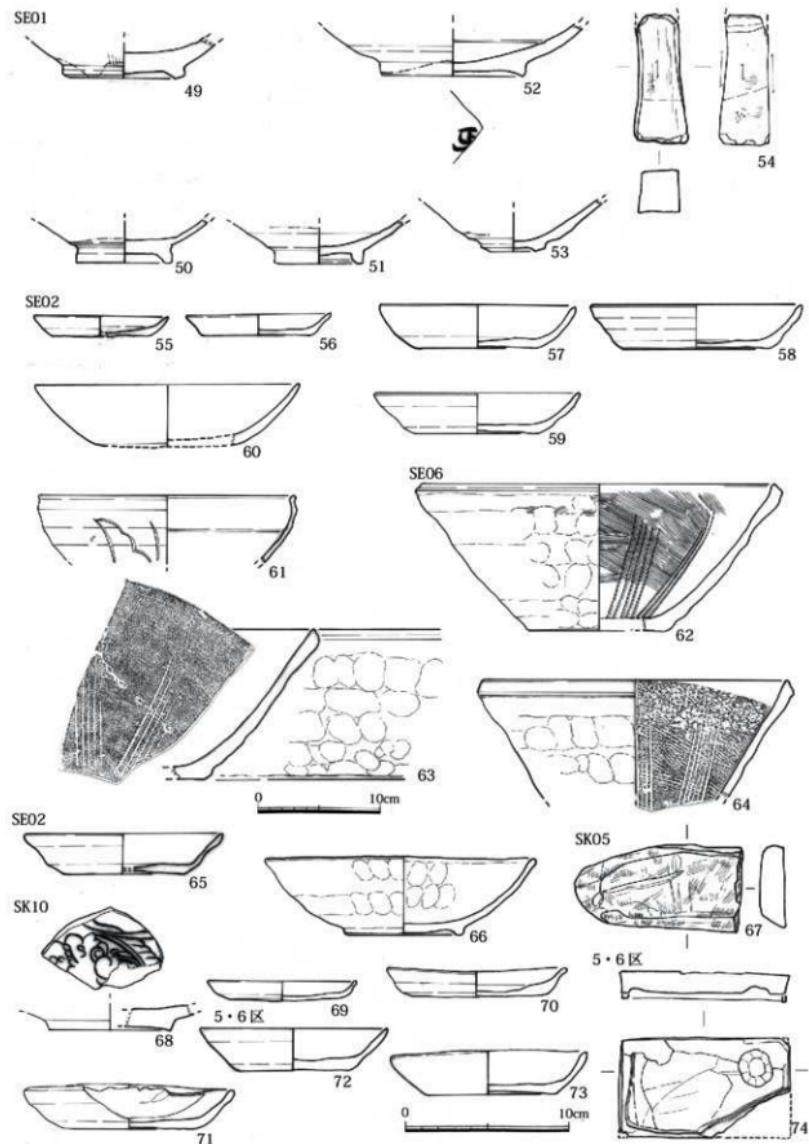
6区で検出した円形井戸。基礎杭で未完掘。埋土は黒色土。62～64は瓦質土器の擂鉢。62は1/4片、63は小片、64は1/5片。口径は62が30.0cm、64が25.4cm。外面指押さえ調整、内面は横・斜め刷毛目に5本単位、63は6本単位の櫛目の条線が入る。いずれも内面は使用で荒れている。



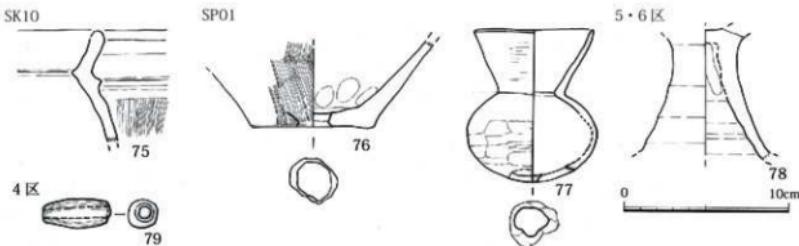
第3図 SEO1出土遺物 (S=1/3)



第4図 SEO1 出土遺物2 (S=1/3)



第5図 SEO1他各遺構出土遺物 (S=1/3・1/4)



第6図 SK10・弥生・古墳時代遺物 (S=1/3)



第7図 遺構検出状況



第8図 SE01 検出状況(東から)

各遺構出土遺物(図5)

65はSD02出土。土師器環1/3片。口径12.2cm。外底部回転糸切離し。66はSD08出土。瓦器楕2/3片。口径16.6cm。外面指押さえ痕が残る。67はSK05出土。扁平な低石か。石材は粘板岩か泥岩。表面軽い磨りで、使用擦痕が不整方向に入る。68はSK10出土。青白磁皿底部1/3片。見込細いへラ線彫り。底部は露胎。

遺構面表採遺物(図5・6)

69は土師器小皿。出土地不明。完存で口径9.1cm。外底部回転糸切離し。70は4区出土。小皿2/3片。口径10.9cm。外底部へラ切後ナデ。板状圧痕がある。71～73は环。71は4区出土。完存であるが口縁一部ひしゃげる。口径は12.8cm。外底部回転糸切で、板状圧痕がある。72・73は5・6区内出土。いずれも1/2片で、74の口径は11.6cm。73は12.0cm。外底部は回転糸切離し。74は5・6区内出土。硯片で石材は粘板岩。使用により傷みが激しい。全長10.5cm、幅6.0cm。79は4区出土。端部を一部欠く管状土錐。表面はナデ調整で、全長4.1cm、孔径0.7cm。

弥生・古墳時代遺物(図6)

75はSK10出土。弥生土器甕口縁片。弥生時代後期前半頃のもの。76はSP01出土。弥生土器底部。底部に孔がある。77は砂丘面出土。古墳時代前期の完存の小型丸底壺。口径9.6cm、器高12.5cm。底部に穿孔がある。78は5・6区出土の須恵器脚部。

1548 宮ノ浦畠中遺跡第1次 (MNU1)

所在地	西区大字宮浦字川端 1476 番、字畠中 1498 番 2
調査原因	専用住宅建設
調査期間	2016. 3. 11
調査面積	368. 37m ²
担当者	板倉有大
処置	記録保存

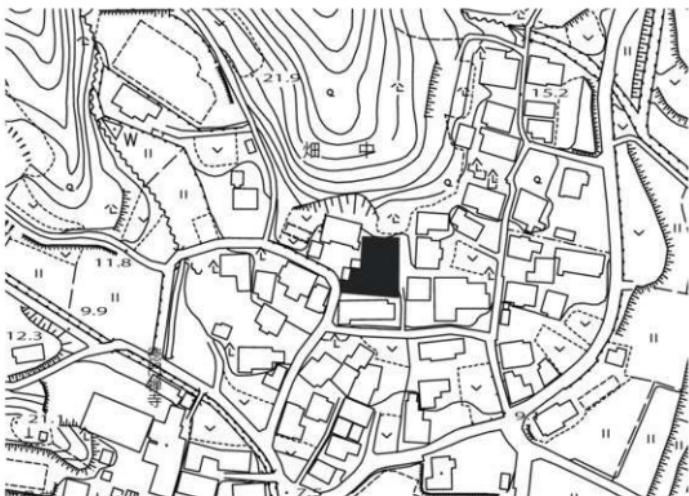
1. 調査に至る経緯

平成 28 (2016) 年 2 月 17 日付で、上記地 (第 1・2 図) の「埋蔵文化財の有無について (照会)」および「埋蔵文化財発掘の届出」が、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課 (当時) に提出された (事前審査番号 27-2-1002)。同課事前審査係では、周辺の試掘実績より、遺構面を表土直下と想定した上で、同年 3 月 1 日に現地にて確認調査 (試掘番号 27-250、調査面積 16.8m²) を行い、現況 GL-30cm で近世の遺構面と遺物包含層を確認した。

工事面積が 57.96m²、基礎掘削が GL-15 ~ -35cm の本工事は、埋蔵文化財への影響は最小限に収まると判断し、同年 3 月 7 日付で「慎重工事」の旨の回答および通知を事業者 (個人)宛てに発行した。ただし、対象地の地表には、造成土に含まれていたと思われる土器片が多量に散乱しており、事業者の同意を得て、3 月 11 日に遺物の表面採集を行った。本遺物報告を宮ノ浦畠中遺跡第 1 次調査として報告を行う。

2. 調査の概要

確認調査では、現況 GL-30cm で褐色砂質シルト粘土の遺構面となる。ビットが散漫に確認され、南側の谷堆積上は同じ標高で整地層が形成されており、染付片が出土した。江戸時代に南向き斜面を造成して居住域としたようだ。南側の谷堆積には弥生時代の遺物が含まれる。敷地の表土中に土器片が多量に含まれており、江戸時代以降に周辺土を客土したものと思われる。表面採集遺物は、コンテナケース 1 箱分である。



第 1 図 調査地点の位置 (126 宮ノ浦 0726 S=1/2000)



第2図 確認調査時の対象地

3. 表面採集遺物（第3・4・5図）

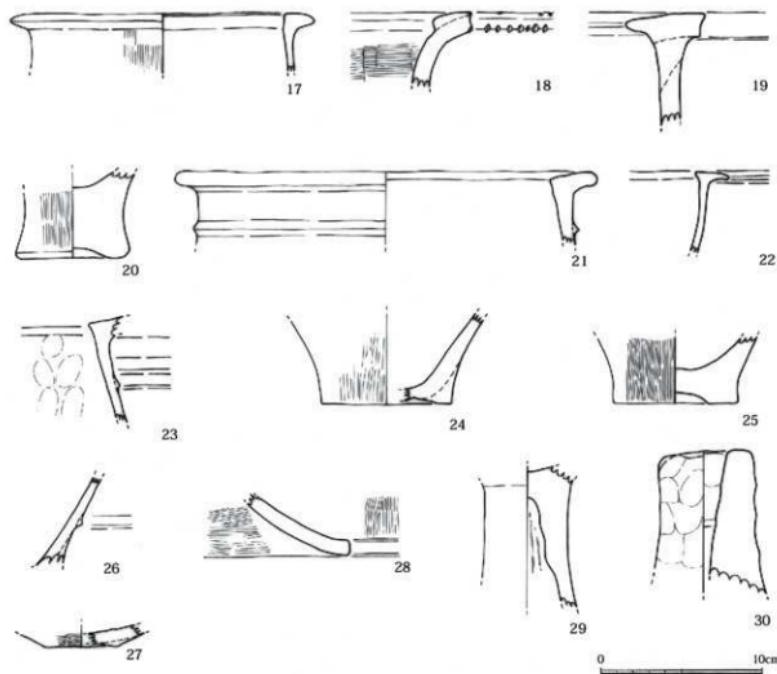
1～11は縄文土器である。1～3は浅鉢で、胎土に径1mm以下の石英・長石を多く含む。1は暗黄灰色を呈し、口唇部内面に幅1.5mmの沈線を引く。2はにぶい黄橙色を呈す。3は外面がにぶい黄橙色、内面は炭素が吸着して褐色を呈す。復元胴径23.7cmを測り、口縁部の付け根外間に幅1.5～2mmの沈線を引く。内面は横方向のミガキで仕上げ、ミガキの幅は1.5～2mmで、外面沈線と同質の棒状工具を使用している可能性がある。4～11は深鉢で、胎土に径1mm以下の石英・長石を多く含み、径1～3mmの孔が多い。8は、口唇部端に幅1.5～2mm幅の刻み目を施す。12は板付式（弥生時代前期）の壺で、径1mmの石英・長石を含み、にぶい黄橙色を呈す。幅1.5mmの二条沈線の下に縦位の貝殻腹縁刺突文を施す。沈線を持つ浅鉢や、深鉢の胎土・調整の特徴から、広田式土器（縄文時代後期）が主体を占めると考えるが、8や12など縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器も含む。

13は結晶片岩製の打製石斧で、後面半分が欠損する。長さ12.9cm、基部幅5cm、刃部幅6.1cmを測る。14は玄武岩製の打ち欠き石錘で、長さ6.5cm、幅7.4cm、厚さ1.4cm、重さ100.5gを測る。15は花崗岩製の磨石で、1/4が残存し、厚さは3.3cmを測る。表面に磨面が形成される。16は花崗岩製の叩石で、長さ9cm、幅4.6cm、厚さ3.2cm、重さ215.3gを測る。上下端に潰れ痕が形成される。13は広田式土器に伴う可能性が高いが、その他石器は弥生土器に伴う可能性もある。

17～30は弥生土器である。17は壺で、橙色を呈し、胎土に径2mm以下の石英・長石を多く含む。復元口径18.6cmを測る。18・19は大型壺で、橙色を呈し、径3mm以下の石英・長石を多く含む。20～25は壺である。20は橙色を呈し、径4mm以下の石英・長石を多く含む。底径7cmを測る。21は橙色を呈し、径2mm以下の石英・長石を含む。復元口径は25.8cmを測る。22はにぶい橙色を呈し、胎土に径2mm以



第3図 表面採集遺物1 (S=1/3)

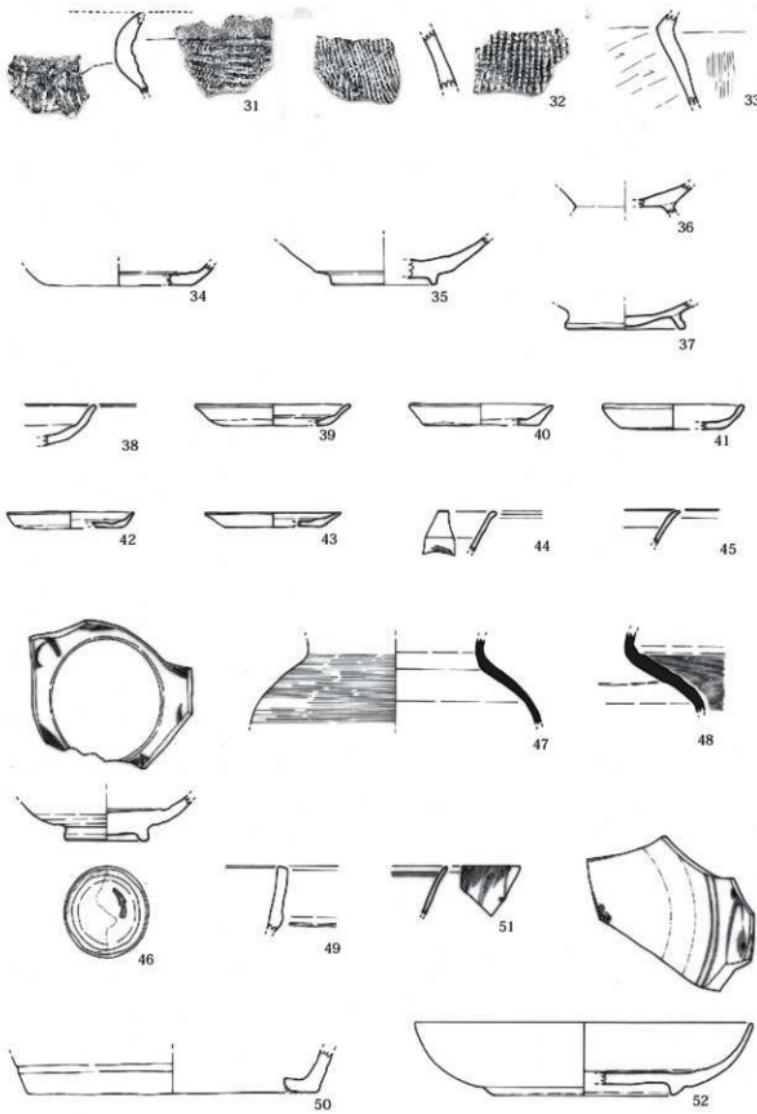


第4図 表面採集遺物2 (S=1/3)

下の石英・長石・赤色粒を含む。23はにぶい橙色を呈し、胎土に径2mm以下の石英・長石を含む。24は、外表面は橙色、内表面はにぶい黄橙色を呈す。径2mm以下の石英・長石を含む。復元底径8cmを測る。25は、外表面はにぶい橙色、内表面は灰黒色を呈し、径3mm以下の石英・長石を含む。26は壺で、明赤褐色を呈し、径2mm以下の石英・長石を多く含む。27は壺で、橙色を呈し、径1mm以下の細砂を含む。復元底径4.4cmを測る。28は高杯で、橙色を呈し、胎土は径2mm以下の石英・長石を含む。29は高杯で、にぶい橙色を呈し、径3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む。30は支脚で、明赤褐色を呈し、胎土は径1mm以下の細砂・金雲母を多く含む。これらは弥生時代前期末～中期前半の土器で、17は城ノ越式、18は金海式、20は城ノ越～須玖I式、19・21～30は須玖I式と考える。

31～38は古代の遺物である。31は横位平行タタキの土師器甕で、橙色を呈し、胎土は径2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む。32は縦位平行タタキの土師器甕で、橙色を呈し、胎土は径1mm以下の砂と赤色粒を含む。31・32は8世紀代の製塩土器である。33は内面ケズリ、外表面ハケメの土師器甕で、浅黄橙色を呈し、胎土は径2mm以下の石英・長石を含む。34は瓦質鉢の底部1/4片で、浅黄橙色を呈し、復元底径は9cmを測る。35は須恵器甕の底部1/4片で、灰色を呈し、復元高台径6.6cmを測る。36は土師器脚台付1/3片で、外表面は橙色、内表面はにぶい黄橙色を呈す。37は黒色土器B類の椀1/4片で、復元高台径7.4cmを測る。38は土師器甕で、にぶい橙色を呈す。36・37・38は10世紀代と考える。

39～46は中世の遺物である。39～43は土師器皿で、復元口径は39が9.6cm、40が9cm、41が8.8cm、



0 10cm

第5図 表面採集遺物3 (S=1/3)

42が8cm、43が8.4cmを測る。41は底部に回転糸切り痕が残る。山本(1990)に基づけばXIV・XV期(12世紀後半)に比定される。44は白磁碗で、胎土は灰白色、釉は薄く、灰色がかった透明を呈す。45は白磁碗で、胎土は灰白色、釉は薄く、ややオリーブがかった透明で、ビンホールが数個残る。46は青磁碗で、胎土は灰色、高台径は5.2cmを測る。太宰府市教委(2000)に基づけば、44・45はV4類、46はI類で、12世紀中頃から後半に比定される。

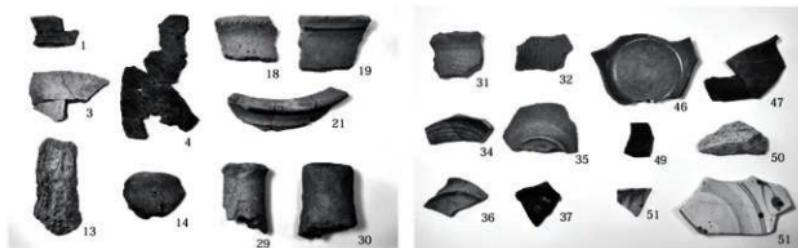
47～52は近世の遺物である。47は須恵器壺で、暗灰色を呈し、復元頭径は10.8cmを測る。48は須恵器壺で、灰黒色を呈す。49は土師質土器の鍋で、橙色を呈し、胎土は細砂粒を少し含む。49は土師質土器の鍋で、浅黄褐色を呈し、胎土は径3mm以下の石英・長石、褐色～黒色粒を含む。復元底径は18cmを測る。51は染付椀で、胎土は灰色、釉はやや灰色がかった透明を呈す。17世紀後半の特徴を示す。52は染付皿1/6片で、胎土は灰白色、釉はやや青みがかった透明を呈す。蛇の目、豊付の釉を剥ぎ、復元口径は21cmを測る。

4.まとめ

宮ノ浦畠中遺跡は、江戸時代以降、大きく開発工事されることなく現在に至っているため埋蔵文化財が良好に残っていると考えられるが、発掘調査実績がなく、性格が不明であった。これまでの地表面採集資料の報告では、黒曜石片や縄文時代後・晩期の土器、磨製石斧が採集されており(高田1980、小池1981)、今回の調査によって、一帯での縄文時代後期末から弥生時代中期の比較的古い遺跡の存在が裏付けられた。また、古代・中世・近世の遺物も含まれており、古代以来、海上交通・交易の要衝として評価されている宮浦・北崎一帯の様相を反映するものと期待される。今後、糸島地域や福岡平野の対外交流史を考える上で、新たな資料を提供する可能性もあるため、周辺の開発工事には注意が必要である。

○引用文献(五十音順)

- 小池哲吾 1981「糸島の縄文文化」『三雲遺跡2(福岡県文化財調査報告書60)』福岡県教育委員会
 高田茂廣 1980「古代の北崎」福岡市立北崎小学校百年誌編集委員会編『北崎小学校百年誌』
 太宰府市教育委員会 2000『大宰府跡XV:陶器分類編』太宰府市教育委員会
 山本信夫 1990「統計上の土器」乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会



第6図 表面採集遺物写真(番号は第3・4・5図番号に対応)

VI 平成 28 年度新指定指定文化財

平成 28 年度の福岡市新登録文化財は、平成 29 年 2 月 3 日開催の福岡市文化財保護審議会において、2 件の文化財について答申を得、平成 29 年 6 月 1 日の福岡市公報により告示された。

1. 登録文化財の概要

登録区分	種別	登録名称	員数	所在地	所有者
有形文化財	建造物	旧高宮貝島家住宅主屋	1 棟	福岡市南区高宮 5 丁目 190 番地 11	福岡市
有形文化財	建造物	旧高宮貝島家住宅茶室	1 棟	福岡市南区高宮 5 丁目 190 番地 12	福岡市

(1) 旧高宮貝島家住宅主屋 1 棟 (有形文化財／建造物)

(2) 旧高宮貝島家住宅茶室 1 棟 (有形文化財／建造物)

旧高宮貝島家住宅は、市内でも有数の閑静な住宅地である高宮に所在する。敷地は面積約 1.9ha、高宮南特別緑地保全地区に指定されており、建物周囲は緑に囲まれている。麻生・安川とともに「筑豊御三家」と称され、炭鉱経営で「炭鉱王」と呼ばれた貝島太助氏の弟の貝島嘉蔵氏の邸宅である。嘉蔵氏の後、太助氏の四男健次氏、健次氏の長孫寿夫氏が継ぎ、平成 17 年以降は福岡市が所有している。

この住宅は大正 4 年に直方市に建設され、昭和 2 年に現地に移築され、洋室と南八畳が増築された。同 13 年に敷地南側に新館の増築、同 22 年に進駐軍接収による主屋の改修、平成 2 年に茶室の移築、平成 13 ~ 14 年に新館及び北東部分が解体された。解体の結果、現在は移築時の半分以下の規模となっている。

外観は、増築を繰り返し雁行する平面と折り重なる屋根が陰影と深みのある意匠を生じさせている。平面は接客空間と生活空間とに分けられ、内部は雨戸障子を開け放てば屋外空間と一体化する。床まわりなどに素性の良い目の詰まった四方柾目の杉造作材が多用され、上品に仕上げられている。

《主屋》

主屋は北西側の生活空間部分が解体されたため、現在接客空間を中心に南北に広がる。木造平屋建で桟瓦葺である。南北に伸びる建物のやや北寄りに本玄関が位置し、本玄関の南に 6 畳の次ノ間、10 畳の応接間、北には 6 畠の事務室、3 畠の内玄関がある。内玄関西側に板敷の広間があり、一角に電話室がある。これら諸室の西側には 5.2 尺幅の豈廊下を南北に通し、西面に瀬縁を設ける。

建物は南北方向に棟をもつ入母屋造であり、玄関から南、西面では桁行全幅に庇を設ける。玄関は屋根を入母屋造妻入、土間を四半敷石貼りとし、式台を備える。内玄関の北側にある 6 畠の書生部屋、豈廊下を南に進み、西に折れ曲がる隅に給仕室、豈廊下を挟み台所、洋室を配する。給仕室の南西、豈廊下を進んだ先に 15 畠の本座敷と 10 畠の次ノ間がある。

書院造の本座敷は天井が棹縁天井であり、次の間との境に鳳凰の板欄間をもうける。特徴のある床まわりは向かって左に床、右に間口1間半奥行3／4間の上段、さらに張り出した3畳に付書院、火頭口のある違棚を設ける。

本座敷の南に位置する「南八畳」は数寄屋造。床・琵琶床・地袋・付書院が設けられ、長押が竹、天井が網代天井と杉丸太竹小舞の差掛天井であり、工夫された意匠で満たされる。

《茶室》

かつて主屋の南に接続していたが、平成2年の改修時に切り離され、南の高台に移築改修された。木造平屋建で切妻造、棟瓦葺、一部銅板葺である。

建物は8畳の広間、4畳半台目の小間の茶室、4畳半の水屋、台所からなる。8畳の広間は矩二方に棹縁を巡らし、床まわりが竹の床柱の床、円窓の平書院、床脇の袖壁に半円の下地窓、その内側に二重の釣棚を設ける。4畳半台目の小間は土庇を架け、床に向かって躰口、その脇に貴人口を設ける本格的な小間の茶室である。

旧高宮貝島家住宅は市内において有数の近代和風建築であり、一部が解体されたとはいえ規模が他に例を見ない。筑豊の石炭産業全盛時の歴史を伝える貴重な建造物であり、九州北部の炭鉱経営者の住宅と比較しても遜色ない価値を有する。今後、「福岡市歴史的建築物の保存及び活用に関する条例」に基づき、保存活用計画を策定後、建物改修工事を施し、用途を変更する転用型活用を予定している。本質的な価値を保存し、長く活用されるためにも文化財として登録するものである。



写真 1
旧高宮貝島家住宅主屋 正面玄関



写真 4
旧高宮貝島家住宅主屋 本座敷内観



写真 2
旧高宮貝島家住宅主屋 本座敷北面



写真 5
旧高宮貝島家住宅茶室 西面



写真 3
旧高宮貝島家住宅主屋 南八疊南面



写真 6
旧高宮貝島家住宅茶室 内観

報告書抄録

よりがな 書名 副題名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集委員会 所在地 発行年月日	ふくおかしめいそつぶんかさいけんぽう 福岡市埋蔵文化財年報 平成28(2016)年度版 31
よりがな 所収遺跡名 所在地	よりがな コード 市町村・遺跡番号 北緯 東経 測量用 測量開始 測量終了 測量面積 (m ²) 測量原因
谷遺跡 (1626 4次) 西区今宿町字花寺198番1他10筆	40135 0627 33°34'15" 130°16'28" 2016.8.23 2017.1.17 392 幼保育園建設
福岡城下町遺跡 (1631 2次) 中央区太名2丁目291番地	40133 2889 33°35'23" 130°23'25" 2016.11.7 2016.11.8 87 共同住宅建設
南八幡遺跡 (1637 20次) 博多区柏生町2丁目26番1	40132 0051 33°32'41" 130°27'31" 2017.1.23 2017.2.6 128 共同住宅建設
博多遺跡群 (8916 49次) 博多区上川端町272-273	40132 0121 33°35'43" 130°24'29" 1989.5.18 1989.5.31 90 駐車場建設
博多遺跡群 (9954 92次) 博多区今宿町2740一部外9筆	40132 0121 33°35'38" 130°24'41" 1995.11.17 1995.11.28 185 共同住宅建設
瓦ノ浦遺中遺跡 (1548 1次) 西区大字瓦浦字八幡1476番,字垣中1496番	40135 0726 33°38'37" 130°13'28" 2017.3.11 2017.3.11 58 個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷遺跡 (1626 4次)	集落跡・墳墓	古墳・中世	古墳・石棺墓・掘立柱建物	須恵器・石器・近世陶磁器・土師器	
福岡城下町遺跡 (1631 2次)	屋敷・役所	江戸	井戸・土坑・ピット	近世陶磁器・土師器	
南八幡遺跡 (1637 20次)	集落跡	古代	竪穴住居・土坑・柱穴	須恵器・土師器	
博多遺跡群 (8916 49次)	集落跡	中世・近世	井戸・土坑・ピット	土師器・貯蔵陶磁器	
博多遺跡群 (9954 92次)	集落跡	弥生・古墳・中世	井戸・土坑・ピット	弥生土器・古式土師器・土師器・陶磁器	
瓦ノ浦遺中遺跡 (1548 1次)	散布地	縄文・弥生・古代・中世・近世	遺物包含層	縄文土器・弥生土器・石器 土師器・近世陶磁器	

福岡市埋蔵文化財年報
Vol.31
一平成28(2016)年度版一

発行日 平成29年12月27日
編集・発行 福岡市教育委員会
〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 株式会社ジーエークリエース
〒810-0001 福岡市中央区天神2-8-49